
おっさんが逝くIS物語

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おっさんが逝くIS物語

【Nコード】

N3816X

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

大神蛮。ニートで駄目人間で童貞である。そんな彼は、ある日ナ
ンパされたビッチを殴ったはいいがその彼氏である御曹司イケメンによって
殺されてしまった。そんな彼を転生させるといった神が現れた。そ
して、転生先は・・・インフィニット・ストラトスだった。

タイトル受けがちよっと危ないと思ったので変更しました。

ブローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う(前書き)

知っている方はどうも。初めての方はこんにちわ。

思っがままに書いた。後悔はしていない。

ブローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う

はて？ここはどこだろうか・・・。

ふと俺は思った。

こういう時は慌てず、落ち着いて行動するものだ。俺ってカッコイ
イ！！

さて、確かに昨日唯に“無・理・や・り”街に連れて行かれたんだ。
あ、唯って俺の幼馴染。まあ、美少女の足元に及ばない女だがな。
話を戻す。一人で歩いてたら迷子になり、いきなり変な女にナンパ
された。

「俺は童貞だ。テメエみたいなビッチに俺の純血は渡さねえ」

って言ったら切れて、ウザいから殴った。

そしたら、次のビッチの男が来てなんか話して帰らせたら次の日・

「あ、俺殺されたんだ」

俺は答えに辿りついてしまったようだ。
って！！

「チクシヨメー！！結局は金か？権力なのか？くたばれイ・ケ・メ・ン！！爆発しろー！！」

「おい」

なんだか声ができる。でも、男だから聞こえない振り。

「おい！！聞いているのか？」

「ワタシノミミ、美少女ニしか反応シナイ」

「反応してるじゃろつが」

「粉バナナだ！！！！」

「日本語おk？」

すると俺の目の前には・・・胸糞悪く、加齢臭のする爺がいた。

「誰が胸糞悪く、加齢臭のする爺だ！！」

「サイコパス？！」

「黙れ！」

「（しゃ、喋れない）」

「当然。僕は神だから」

「髪？」

あ、喋れた。

「ゴッドじゃ」

「俺は幼女神しか信じない」

「まあいい。実はお前さん死んだから転生させることにしたんじゃ」

「却下だ。転生より蘇生させろ」

「却下」

「んだよ！！神なら蘇生ぐらいさせるよ！俺はまだ童貞卒業してねーんだよ！！女抱きてーんだよ！！俺の聖剣まだ未使用なんだよ！！」

「黙れ、童貞」

「童貞舐めんなー！！」

くしばらくウザい言い争いがあるので綺麗な空を眺めてお待ちくださいー

「で、転生っていうけどなに？テンプレ乙的な原作ブレイク的なアレですか？」

「そうじゃ」

「いやだ。天国逝きたい。天使とイチャイチャしたい。界王様から界王拳ならう」

「黙れ、邪気眼。ちなみにテメーにやる天使はいねえ」

「……くそ、死んでも童貞には居場所がないのかよ」

「だから、転生させてやると言っているだろっ」

「やだよ、めんどくさい。また人生一からやり直すのなんかダリイもん」

「わかった、わかった。だから、キンクリみたくしてやるから」

「それなら許可する」

「はー（メンドクサイ童貞じゃのっ）」

神はあまりにもウザい童貞に会話すら苦痛に感じるようになった。

「転生場所は？」

「インフィニット・ストラトス
IS」

「なにそれ？」

「ん〜、女が世界を支配してる？」

「ようわからん」

「まあ行けばわかる」

まあ、そつちのが面白いしろう。
ほっほっほ。

「というわけで転生するに当たって、お前さんに特典。まあ、願いをいくつか聞いてやるう」

「別にいらねえ」

「ひよ！なんで？！身体能力MAXとか俺TUEEEEとかしたくないのか？！」

「別にニートに能力はいらぬ。マウスをクリックできるだけの力

があればいい。それに俺童貞歴30歳だから魔法使えるし」

「……………」

ほ、本当じゃ。地味に魔力というかMPがある……。

「そ、それでも神としての立場が……」

「じゃあ、アレでいいや。人をくれ」

「人？」

「ああ、なんていうか技術的な人間が欲しいんだよ。そうだなー、デモンベインのウエストでいいや」

「（また、濃くて地味なキャラを選んだのう）わかった。それにしよう」

「あんがと」

「それとなにか願いが思いついたら念じればまたここに来るようにしておくからのう」

「誰が爺と会いたがる……か……！！！！！！」

するといきなり俺の足元に穴が開き、俺はそこに落ちた。

そして、それは次第にしまってまた白い空間に戻り、神はその場か

ら消えた。

後日

「はー、厄介な奴だったのう」

高級な椅子に座りこの間の童貞のことを思い出していた神。最近、部下からあの童貞についての資料ができたのでさっそくみてみた。

「……うそーん」

そこには確かにニートで駄目人間で童貞とあつたが、幼馴染の超美少女から好意を寄せられているがまるつきし気付いていない最低の男。

「って、マジで美少女ー!!」

その子の写真をみてあら不思議。まるで女神のような女性だった。しかも、あの童貞の同い年で未婚。しかも……だったとは。

「本当、蘇生してやればよかったかのう……」

これでは、彼女がかわいそうじゃ。うん、彼女が。
それから、目で順に追っていた。するとあるものが目に付いた。

そこには……

あの【大神一郎】の末裔である。と書かれていた。

つまり……

【大神蛮】は、実はモテる（特殊なイベントをクリアしたのみ）

「本当、駄目人間じゃなければいい人生を送れたものを……」

そう思った儂は彼の“頼み”にちょっとだけサービスすることにしたのだった。

プロローグ やっぱり、転生より蘇生の方がいいと俺は思う（後書き）

というわけで、始めてしまったよ。

しかし、こんな作品でも読んで感想くれたらうれしい。

実際はもう一つの方の息抜きでやっているんだが……。

さて、あと一話と設定を出すのでよろしく

第一話 とりあえずあえず現状報告的なことをしようと思った（前書き）

きつとこれから迷言の嵐を連発してくれるはず。

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った

おっす、オラ大神蛮！30歳で魔法使いの童貞だ。見知らぬ世界に来て、オラなんだかワクワクして。

「こねえよ、馬鹿」

改めて、大神蛮だ。さて、転生したのでちょっと現状報告だ。気付いたらいつもの俺だった。よくわからんが、一応俺は別の人生を過ごしていたらしい。でも、記憶をみる限りでは死ぬ前と全然変わってなかったぜ！

ただ、幼馴染の【葛城唯】だけはいなかった。べ、別に寂しかったわけじゃないからな！あいつがいなくて清々してるところだ！

ここで、俺の頼んだことを教えよう。ドクターウエストみたいな技術屋がほしいという頼みだ。なんで、これにしたかというところ。そういうやつがいればギャグ補正でなんでも造ってくれる気がするからだ。

しかし、ところどころい。

ここで、どんな間違え起きたかは知らんが……。ウエストだけじゃなくて霸道財閥まであった。

……。デモベフラグ？ロリ本は何処かな？

おっほん！

で、関係はというと。霸道構造が大神家と仲良かった。俺も顔見知り。瑠璃から兄的な存在へ。みたいな感じだ。

ちなみにウエストにもあったよ。やっぱり、あいつは俺が認める漢だけはあったぜ。

で、この世界。ISだっけ？

記憶で知ったが……。女が使ったって宝の持ち腐れだぜ！男が使ったってその浪漫があると俺は思うね。

そして、現在はというと……。

「蛮、起きなさい！もう、お昼なんですよ！」

霸道財閥の総帥に起こされていた。

「んだよ、瑠璃。まだ、お昼だろ？いい子は寝る時間だ」

「いい子は起きている時間です！」

「30の俺にいい子なんて言われてもな〜」

「もう、しりません！」

バタン！

扉を閉めて出て行った。

あんなこと言っただって、また明日起こしに来てくるんだ。可愛い奴め。

あ？お前、紳士だらだった？

ばーる。アレは妹的な存在だからいいんだよ。

にしても、お兄様と呼んでいたあの時代が懐かしい。俺、育て方間違っただかな？

まあいいか。さて、寝よ。

瑠璃 side

霸道瑠璃。世界にその名を轟かせる霸道財閥の総帥である。

そんな彼女、瑠璃は彼を起こしたあと自分のオフィスで溜息をついていた。

「はあ。まったく、蛮には困ったものです」

いつも、いつもああ言うてはこう言う人間。ニートで駄目人間で童・

・・・こほん。なんですから。
いつも、心配している私の身にもなってほしいです。それに・・・
異性しても見てほしいのに・・・。

「お嬢様、また壘様は駄々をこねているのですか？」

執事のウインフィールドは紅茶を入れながら私に聞いてきました。

「駄々と言うよりは・・・子供です。はあ、昔はあんなにカツコイ
イ・・・くなかったですわね」

「ふ、そうですね。しかし、あれでも壘様は大旦那様からは『あい
つはやればできる子だ』というも仰ってましたからね」

「お爺様の言葉を疑うわけではありませんが、やる時期が一年に一
回あればいい方なんですから」

「それでも、壘様のことは誇りに思っているんでしょう？」

「当然です。私の、自慢のお兄様ですから」

そう、お兄様は私の、世界で最高のお兄様なんですから。

End

第一話 とりあえず現状報告的なことをしようと思った（後書き）

実は書いてて楽しい

主人公設定

主人公 大神 蛮

モデル ガンソードのヴァンをちよつとイケメンにした感じ？

容姿 ブサイクではなく、喋らなければそれなりの顔だったりする。本人はブサイクだと思っている。

服装 普段着は何故かタキシードに似た物を着用し不思議な帽子をかぶっている（ガンソードのヴァンのアレ）

年齢 30歳 転生後18歳です（嘘）

能力 スカウター 邪気眼

大好きな者 美少女（蛮から見ても） 小さい子（紳士だから見守るだけ）

嫌いな者 イケメン（一夏も含まれる） あとウザい女

職業 ニート 自宅警備員 邪気眼使い 魔法使い見習い

友人関係 転生前 唯（幼馴染）ソウルブラザーズ 魂友 転生後 ドクターウエスト

ト エルザ 霸道瑠璃 ウインフィールド その他財閥の人

二つ名 死ぬ前までは『無職な男 蛮』 転生後『高校生な蛮』らしい

蛮から一言『俺は女だつて殴れる』

唯依から一言『蛮はやればできる子』

備考

どこにでもいる普通のニートで駄目人間で童貞だった。ある日、変な女（蛮曰くビッチ）に『童貞きもーい』と言われカッとなって顔をぶん殴った。そしたら、そのビッチがどっかの御曹司の男の女で殺され、会いたくもない糞爺に転生させられた。

生前は上記のように童貞で駄目人間。彼女いない歴年齢であり、イ

ケメンが大嫌い。

しかし、そんな彼にも幼馴染の唯依という子がおり。（ちなみに彼女はエリートコースまっしぐら）。鬱陶しく思っていた（唯依に対してはツンデレ）。

また、30歳になったことで魔法が使える（ほんの些細な魔法）。他にも邪気眼で漫画を読めばある程度使えるというある意味でチート身体能力。

実はある血筋の人間で、たまに身体勝手に動くらしい？

作者曰く 『現実的な転生者を求めたらこんな感じかなと思った』あと、つよきすのフカヒレが一番近い感じかもしれない。

幼馴染 葛城 唯依

まさに美少女と言っべき存在であるが壺にとっては美少女の足元に及ばないらしい。

小さい頃から壺と一緒に、ニートになった彼を今でも気かけ外に出そうとしている。

ぶっっちゃけ壺のことが好きだがまったく相手にされていないが彼女から見れば照れ隠しらしい。ちなみに である。

第二話 え、社会復帰しろ？俺もついい歳なんだけど（前書き）

不定期といいながら投稿する俺

第二話 え、社会復帰しろ？俺もついい歳なんだけど

すべてはこの一言から始まった。

「というわけで、蛭。あなたにはIS学園に行ってもらいます」

「なにがというわけで俺はあんなところにいかなくてはならないのか？」

ちなみに俺はISが使えるらしい。

回想。財閥の工場にいった「ISがあった」「あーこれがISなのかぼちつと「ん？なんか装着できたぞ。てな感じ。」

「それは、蛭。あなたを更正させるためです。このままではあなたは一生私が面倒をみななければいけません」

それはそれでいいのですが……。そ、それではお兄様のためになりませんかからね！

「えーヤダよお。瑠璃、俺を一生養ってくれるって言っただろっ？」

「じゃあ、結婚しましょう」

「妹で」

・・・ッ！お兄様はどうでもいい所で反応がいいんですから。

「それになあ、俺は30だぞ？高校生って柄じゃねえ」

「大丈夫ですよ、蛮様。ちょっと背が高くて、ちょっと老け顔な高校生で通りますから」

「さりげなくフォローすんな、ウインフィールド」

しかし、彼の言う通り蛮は背が高く老け顔なのでそれなりにみえなくはなかったりする。

「それに、蛮様」

「なんだ」

「もう先方と手続きを交してしまいましたので」

「・・・なにそれ。酷い。だから、権力って嫌い」

「それに、蛮以外の男性でISが使える人が発見されたらしいです

から時期的には丁度いいんです」

「誰それ？」

「この方です」

ウィンフィールドがリストを見せてくれた。そこには……イケメンらしき顔をした餓鬼がいた。

「俺の嫌いなタイプ」

イケメンは死ねばいいと思う。

「でしょうね」

「それに、IS学園は女性だけです。蛮様の好きな美少女がみつかるかもしれませんよ？」

「む」

それを聞いて私はちょっと嫉妬してしまいました。彼はお兄様を行かせようとそう言っているのでしょうか……やっぱりむかつかますわ。

「いるわけない。それに、餓鬼には興味ない」

「まあ、当然ですわよね」

「しかし、もう話は済ませてしまっていますし」

「俺はいないっいたらいいかない!」

まるで、おもちゃコーナーでおもちゃをねだるような子供だった。それを見て瑠璃は溜息をつき、最終手段に出た。

「では、蛮。ごうじましよう。もし、あなたがIS学園に三年在学しちゃんと卒業できたら」

「できたら?」

「一生養ってあげます」

「マジ?」

「真剣まじです」

「」「」「」「」

「ヤッフー……!……!……!これで、俺も天の道みたいにロイヤルニートだぜ……!」

配管工ジャンプをしながら叫びまくるおっさん。
やはり、自分の年齢などを自覚していないらしい。
だが、彼は肝心なことに気付いていなかった。

「（ふふ。これで、三年たてばお兄様は私のモ・ノ）」

瑠璃は策士だった。

対してウインフィールドは。

「（これで霸道財閥も安泰です）」

同じだった。

「イエーイ、空中一回転!!」

なぜか、跳んで一回くるっと回って見せた。二トの癖にハイスペ
ツクである。

こうして、蛮のES学園行きが決まったのである。
果たして、彼に一体どんな運命が待っているのか?!

次回まで、ご期待ください

「関係ないけど、フォーゼの名前の意味は40周年「4（ふおー）（ぜろ）（でフォーゼなんだぜ？これで、友達に自慢しよう！）」

「誰に言っているのですか、あなたは」

第二話 え、社会復帰しろ？俺もついい歳なんだけど（後書き）

さて、次回からES学園に行くことになります。
しかし、おっさんが行くのって無理あるよねー

第三話 ほらみる。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんはなんていうかこれからいろいろと飛ばします。あと、主人公視点が多いと思われます。

それと、主人公はあるくクロスオーバー。いろんな人の名前やネタが出てきます。

第三話 ほらみる。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

童貞 side

拝啓

天国にいるお父様、お母様。あなた達のいい意味で期待を裏切った息子は今15年ぶりの高校生活を迎えようとしています。

まあ、これでも幼馴染の唯に無理やり同じ大学。確か・・・MIT（マサチューセツさんとか大学）にも言ったような気がします。そこで、天才ちびっこ先生にも会いました。ベッキー、元気かな・・・。

それは、さておき。私は今IS学園、自分の教室である1-Aにいます。席は窓側の一番後ろ。まさに、絶好の場所。幼女神は常に俺と共にあるらしいです。

やはり、周りは女ばかり。しかし、美少女は居ません。

あ、でも副担任の真耶ちゃんは別ですよ？眼鏡っ子で可愛い。そして、けしからんお胸をお持ちです。

で、ただいま自己紹介を行っております。男は俺以外にむかつくイケメンしかいません。

イケメンが自己紹介をしているのですが。

「織斑一夏です・・・。よろしく、お願いします・・・。以上で

す！」

はい、君。企業の面接は絶対に受からないね。間違いなく。で、周りの女子も期待していたらしくかなり落ち込んでいる。テンション的に。

「まとも、自己紹介もできんのか貴様は」

現れたのはアレだ。確か・・・ブリーナク？だっけ。なんか有名な人。

俺は知らん。

ていうか、アレだね。ギャルゲーの気が強い委員長とか、お嬢様、お姫様系の生徒会長とかなタイプだろう。

けど、中身を崩せば落ちるぜ・・・へっへ・・・ま、落とさんが。

「改めて、初めまして諸君。私がこのクラスの担任の織斑千冬姉だ。諸君を一年で使い物になる操縦者にするのが私の仕事だ。出来ないものには出来るまで指導をしてやる。逆らってもいいが私のいう事を聞け、いいな」

じゃあ、授業受けたくないでござる。

『ぎゃあああああああ！！』

『本物よーーーーー!!!!!!』

うるさい。周りの女子がうるさい。
で、色々あって・・・。

「次、大神。さっさと自己紹介しろ」

かちーん。おじさん、怒っちゃったよ？
年上に対する礼儀がなってないんじゃないかな？調子に乗るなよ、
アバズレ。

「・・・大神蛮・・・d、です。こんななりですが自分はちよつと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です・・・。あ、間違えた」

『ズコーーーーー』

なんか、大半が机に埋もれていた。ま、いつか。ばれたって俺に損得ないし。

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ぬばいと思う」

最初が肝心ってよく言うけど、ここで群れをつくる気はない。ていうか、美少女がいない時点でもう帰りたい。

あ、真耶ちゃんは違うからね。

End

織斑一夏 side

俺の名は織斑一夏。偶然、ISが使える男になった男だ。本当、なんで動かせちまったんだ……。周りは女子だけだし、俺以外にも男がいるけどなんか……。おっさんがいる。

で、自己紹介しただけで千冬姉にはぶたれるしろくなことがない。そして、あのおっさんの番。

「……。大神蛮……。d、です。こんななりですが自分はちよつと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です……。あ、間違えた」

って！やっぱり、おっさんなのか？もう、そういう年なのか？！

「で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ぬ

ばいと思っ」

は・・・？今、なんて言った？

と、とにかく。男同士、仲良くしたい。休憩時間に話しかけてみようと思った。

だが、まさかあんなことになるとはこの時俺は思っっていなかった。

End

全員の自己紹介が終わり、休憩時間となった。

壘は机に伏せ寝ていた。そんな彼に同じ男である一夏が話をしようと近づいた。男二人が一緒になっているその光景をクラス中の女子が見ていた。

「あの・・・大神さん？」

一夏はおそらく年上だと思ったので一応敬語で尋ねた。

「・・・ああん？」

「いや、同じ男同士だから・・・話をしたいなあと・・・」

気付けばイケメンが俺の前に立っていた。そして、俺はある事をし
だした。

「（スカウターON!!）」

説明しよう。スカウターとはイケメンの数値を測るものである。基
準を0とし、上からいくとイケメンであり、マイナスになるブサイ
クという数値が現れる。そして、一夏は……。

「（5、10……25。ここら辺は普通だな）」

ちなみに、本当のイケメンは測らずとも見ただけで殺意が湧くらし
い。

「（30……40なに？まだ上がるだど……ふむ、55。ち
イケメンめ……こ、これは?!）」

すると驚きのデータが検出された。

「（は、ハーレムの可能性あり……だど？つまり、フラグ建築士と
いうわけか。決まったな）」

そう、すでにこの瞬間から互いの関係は決まってしまったのだ。ていうか、関わること自体がありえないのだろう。

「失せろ、イケメン。俺はお前が嫌いだ。だから、二度と俺に話しかけるな」

「は？・・・いや、な、なんで!？」

「その口を接着剤で止められて欲しくないならとっと失せろ」

そう言いつつも俺は席を立ちがあり教室を出た。
ふ、全国のブサイクが見たら俺を賞賛するだろう。よくやったと。

こうして、俺の学園生活が幕を開けたのであった。

第三話 ほらみる。美少女なんてどこにもいないじゃないか。あ、真耶ちゃんは

次回の予定ではデモンベインが出てきそうです。

イケメンなんてふるぼっこ

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ(前書き)

同じところをまた書くのが面倒なのでかなり略しています。

正直、誰かの視点をするのが大変なんだよね。

まあ、とにかくデモンベインがでるよ!!

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ

唐突だが俺は馬鹿な餓鬼どもの喧嘩に巻き込まれた。

あの大佐殿に似たような声を持つお嬢様馬鹿があのにケメンに何か見下したようなことを言ったら馬鹿が食いついて・・・。

で一週間後に試合をすることになって、ついでだから俺もやれと命令してきやがった。

俺を巻き込むな！！

そして、一週間などあつという間に流れ。現在、俺はアリーナでの戦闘を見ている。

イケメンVS大佐殿もどき。

イケメンのISは白式と言つらしく、なんか見てる限り刀しかない。浪漫あるなあと思っていたが相手のISがブルー・ティアーズとかいう遠距離のISでどうみても振りだった。

なんか、ファンネルが飛んでるけど俺が想像していたファンネルと全然違う。

アレだよ、こう・・・ぴゅん、ぴゅん、ぴゅん！ぴゅんって飛んでないんだ

よね！

メンドクサイのでその後の展開。

堕ちなさい！＝うわぁ！ドーン・・・＝やりましたわ！＝やってない

みたいな感じ。なんか、イケメンの機体が変わったけどそんなに変わってなくてね？

もし、これがデジモンだったらあの曲が流れるからめっちゃテンションがあがるんだけどな・・・。

まあ、感知的に処刑BGMが流れないところをみると負けるな。イケメンは。ざまwwww。

そして、案の定イケメンは負けた。けっけ。

で、俺の番な訳だが。

「よし、大神。さっさとピットから出る」

「・・・へいへい」

「返事は、はいだ」

「ほーい」

「（ギロリ）」

へへーんだ。睨んでも怖くねえよ。
まあ、ここはちょっと挑発でもしておくか。

「たく、年上に対する態度がなっていないんじゃないか？」

「そつだとしても、貴様私の“生徒”だ」

「ふん。俺が認めている教師は金八先生か尾木ママと地獄先生ぐら
いだ」

「……」

「ふ、知らんか。教師の癖に、あの偉大な先生たちを」

まあ、両者ともこの世界にはいないとは思うが。

「あまり調子に乗るなよ？……童貞が」

言ったな。お前は言うてはならんことを言った。
確かに俺は童貞だ。認めている。俺は童貞だと。それを男に言われ
たってなんとも思わない。イケメンは除く。だが、女に言われるの
だけは許してはならない。赦してはならない。

「この処女が……魔法使い舐めんなよ？」

パチン！

俺は指を鳴らした。

しかし、周りに変化はない。

「ふん、一体何を……………」

「どうしたんですかあ？（2828）」

だが、すぐに効果は表れていた。それは、千冬自身だ。そう、魔法は彼女自身に起きていたのだ。

説明しよう。大神壱はMPを消費することで本当にどうでもいい魔法が使えるのだ！

ちなみに、MPは30。まあ、年齢。意外と使ったら回復するのだが、回復の方法がこれまた意外でそういう系のモノをみれば回復する。感覚でわかるらしい。

「貴様……………」

ちなみに、壱がかけた魔法は……………ホックを外す魔法であった。

「さして、逝ってくるかな……………」

そして、俺は冷静に保っている女を置き去りにピットに向かった。

「じゃあ、いくかな……。アル」

『うむ、やっと出番か』

俺は腰のホルスターから本を取り出した。これが、俺の機体の待機形態である。しかも、なぜかAIつきで、そのAIがアル・アジフ。

別に俺、そこまで願っていないんだけどな……。

『ほれ、さっさと起動キーを言わんか』

「なあ、本当にいなきゃいけないのか？」

『何を言っている？お主だって、最初はノリノリでやっておったではないか』

「いや、アレは感動と言うか若気の至りというか……。若くないけど」

『とにかく言わんと起動しないからな』

「ケチ。……。はあ、わかった。だから、合わせろ」

『うぬ。それでいいのだ』

そして、俺は気をとりなして。

「憎悪の空より来りて」

『正しき怒りを胸に』

「我らは魔を断つ剣をとる」

汝、無垢なる刃 デモンベイン！！

纏うは鋼。だが、ただの鋼ではない。ヒビイロカネと呼ばれる特殊合金、それは鉛の弾丸ではビクともしない強固な鋼。

それを全身に纏い、その姿は鋼鉄の戦士。

だが、それはISと呼ぶには相応しくない。そう、これはISではない。機体を動かすのは『銀鍵守護神機関』 『獅子の心臓（コル・レニオス）』と呼ばれるISのコアとは別のモノ。そして、何よりこの機体を動かすのに必要な気合と勇気と根性である。

ちなみに、蛮にはどれも当てはまらないものだ。

だが、蛮が普通のISを動かしたのは確かである。

このデモンベインは霸道鋼造が立案し長年かけ、何故かウエストとかなによって完成した。

とにかく、なんかスゲー機体なのだ！！

「さあて、いこうか」

『応！』

アリーナに出るとそこには俺を見下している大佐殿もどきが。

「あら、来ましたの？おじさまにおキツイでしょうから手加減でも差し上げましょうか？」

「・・・だってよ」

『ふん。青臭い餓鬼が。身の程知らずとはこのことよ』

まあ、確かにそうだ。デモンベインにはリミッターが何重にもかけてある。ある一定までのエネルギーを設定し、それが終わったら負けという感じなのだ。

「それより、一つ聞きたいことがあるんだがいいか？」

「いいですわよ」

「お前貴族なんだってな」

「ええ、あなたみたいな庶民とは違いますわ」

「ふーん。まあ、こんなのが貴族とか笑わせるな」

「なんですって……」

蛮の言葉にセシリアは反応した。彼女は女尊男卑の影響が大きく、大きな態度をとっていたのだ。だから、彼の言葉にカチーンときたのだ。

「俺が知っている貴族は誇り高く、何より人を差別などしない」

そうあの誇り高き海賊の末裔？ 誇り高く、そして美しかったあの人。そう、昔は綺麗だった。けど、そんなことを言ったら俺は殺される。

45

「ふ、ふん。そんなの信用できませんわ」

「餓鬼にはわからんよ」

「なら、その誇り高い貴族を紹介してくださらない？」

「俺に勝ったら教えてやるよ」

「調子に乗って……。いいですわ。手加減などしてあげません。徹底的に叩きのめして差し上げますわ」

「まったく、大佐殿もどきがなにを」

『両者位置について』

アナウンサーが入り両者位置につく。ちになみに、デモンベインは飛べないので地上にいる。

『試合開始』

「さあ、落ちなさい！」

「俺はもう地上にいるけどな」

ブルー・ティアーズが装備しているスターライトを避ける。それから、軽々とステップを踏みながら敵の攻撃を避ける。

「ッ、ちょこまかと」

「あー、だりい」

セシリアは必死に狙ってはいるが蛮はそれを避ける。しかも、飽きてきていた。

『「じゃ、真面目にやらんか！」』

「だってよ、避けてるだけじゃつまらないんだもん」

『仕掛ければいいだろが』

「ん〜めんどくさいと言うか」

『まあ、お主が相手をするには弱いのは確かだな。うむ』

「餓鬼相手に向きになるのもなあ」

「何を一人でブツブツと！」

ちなみに、アルとの会話は蛮にしかできない。周りからは独り言を言っているようにしか見えない。

「それに・・・」

蛮はあることを思い出していた。

それは、このデモンベインは言わばゲームの最初と同じ状態なのだ。いや、第一章と言うべきか。武装はバルカンとアトランティス・ストライク、そしてレムリアインパクト。

特にレムリアインパクトは威力が高すぎるので使用が禁止。リミッター無でやるとES諸共パイロットが昇華されちまうのさ！！
だから、ニトクリスの鏡とかアトラック・ナチャもない。

「さらに言えば飛べないもんな」

『仕方あるまい。まだ、我とこやつは完全ではない』

そう飛べないのだ。跳べるが飛べない。なんていう矛盾。
まあ、原作でも後半しか飛んでないしな……。

『ん？なにやら向かってきたぞ？』

目をやるとそこにビットが来た。

俺思っただけどビットとかファンネルって言う人は年代が上で、ドラグーンて言う子はアレだと思っただよね。

「さあ、私のブルー・ティアーズで踊りなさい」

「悪いな。ダンスは美少女と踊るって決めてるんでな」

「私がそうでないと言いたいのかしら!？」

「青臭い餓鬼なんか興味ねえ」

「ッ！落ちなさい!！」

ブルー・ティアーズがデモンベインを狙う。
しかし、またもや簡単に避けられる。

「仕方ない、仕掛けるか」

『おお、お主が自分から動くとは』

アルは蛭が自分から動くことに驚いていた。まあ、動いたら負けと言っている男だから仕方がない。

「だって、終わらないんだもん」

『まあ、そうだな』

そして、遂に蛭が動く。

しかし、敵は空の上。蛭は意外な行動に移る。

「秘儀ビット跳び！」

すると彼はビットを踏み台にして彼女に近づいた。

「な！！」

流石の彼女も驚いていた。

そして——

「アル！」

『断鎖術式番号ティマイオス、弐号クリティアス起動！』

デモンベインの強大な脚部？から出ている突起が起動する。

「行くぜ！アトランティス・・・」

最後のビットを踏み台にして高く跳びながら一回転。

『『ストライクーーーー！！！！』』

まるで、流星のように蹴りを突き出しながら落ちてくるデモンベイン。

セシリアは避けようとするが反応が遅ぎ、アトランティス・ストライクをもろに喰らい。

「きゃああああああああ！！！！」

ドーン！！！！

アリーナの壁にめり込んで激突した。
一方蛮は。

「決まったな」

『まあ、まずまずと言ったところだな』

まったく気にしていなかった。

第四話 憎悪の空より来りて・・・恥ずかしくて言えねえよ（後書き）

実は、この世界というわ生前でもそうなんですがある作品とクロスしているのです。

まあ、今はでないけど。

さて、次回は一夏戦なんですけど圧倒的に一夏が負ける展開しか思いつかない。

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!! (前書き)

放っておいたら評価がかなりあがっていた。。。

なぜだ？

いや、うれしいんですけどね？

第五話 イケメンは消毒だあ~~~~!!

千冬side

大神蛮。世間では二人目のISの男性操縦者。これを聞いてまず思ったのが、驚きだった。一夏に対してはあの馬鹿が仕組んだことだが、そいつは純粹にISを起動したと言うことになる。そして、さらに驚いたのがその年齢だった。

30歳……。

そう、私よりも年上でおっさんである。

当人からしてみれば苦痛以外の何物でもないだろう。そして、政府から送られてきた資料にはほとんど個人情報に掲載されていないかった。出身地、学歴……。そのほとんどが黒く塗り潰されていた。あったのは名前と生年月日と好きな者と嫌いな者ぐら이었다。

その中身も目を疑うものだったが……。

しかし、私もそんなモノを認めるはずがなく政府に問い合わせて帰ってきた言葉が。

『霸道財閥が関わっている』

霸道財閥。世界の霸道と呼ばれ、そこら辺にあるものからないものまで生産している世界的企業である。

政治にも一枚絡んでおり覇道に逆らうこと自体愚かだと思い知らされる。

さらに言えばここIS学園の投資も行なっているらしく、IS学園側としては逆らえない。つまりアレであり、政府からも。

『粗相のない扱いをするように。さらに言えば織斑一夏より重要人物』

と返ってきた。

だから、私はそれなりの対応しようとしたのだが……。最初のあいさつで。

『……大神蛮・・d、です。こんななりですが自分はちよつと身長が人より高くて、老け顔なだけなので、ピッチピッチの18歳です……。あ、間違えた』

本人は正体を隠そうとしていたらしいがそれも早速失敗していた。さらに……。

『で、嫌いな者はイケメンとリア充です。とにかくイケメンは死ぬばいと思っ』

本当に書いてあったことを言うとは思わなかった。そのあと、一夏が彼に話しかけたがなにやら上手くいかなかったと聞いた。

そして、あの馬鹿がイギリスの候補生と面倒を起こし模擬戦をすることになった。

そこで私はワザと彼を巻き込んだ。理由は、それほど政府が大事にする理由が知りたかったためと興味だ。

だが、彼は人としては最低の部類に入った。

確かに彼の方が年上だが彼は生徒だ。

彼は反抗し、言い合いになり私はつい童貞と言ってしまった。向こうも私を処女といい。ていうか、なんで私がしょ、処女だとわかったのだ!?

(彼のスキルです)

そして、彼は魔法使いとか言いだした途端私のブラのホックが外れた。私は冷静を保ったが彼にはお見通しだった。

これで、私は彼を人として最低の部類として見た。

だが、それは模擬戦で考えを改めて考えさせられた。

セシリア・オルコットはそれなりにはやる生徒だ。初心者相手にしてはだが。

だが、所詮その程度。

だから、一夏が勝てなくても仕方がない。アレは機体と本人が原因であるが。

そして、アリーナに現れた彼のISは異形だった。全身装甲であり、まさに鋼鉄の塊だ。

試合が始まり、戦いは始まった。

セシリアは相変わらずの戦いだっただけだ。対して彼はそれをすべて避けていた。

ただ、避けているのではない。ある一定の範囲内のみで避けているのだ。

そして、無駄のない動き。まるで、洗礼されたかのような動きだ。

彼はただ避けているだけだったのがとうとう動いた。と思ったらセシリアのISのビットを踏み台にして彼は蹴りを放った。

驚くはその威力だ。セシリアはそのままアリーナの壁に埋め込んでいた……。

「これが彼の實力……」

私は、とんでもない男を怒らせたのかもしれない。

End

試合終了後。

壁に埋め込んでいるセシリアは職員に回収された。そのまま第三試合が開始されるため蛸はそのままアリーナに残っていた。そして、器用なことに腕部と頭部の装甲を解除し煙草を吸っていた。

「ふうー。最近タバコ税が上がりそうのでロクに吸えやしない」

『何を言っておる。その金は全部あの小娘の財布から出ているくせに』

「ちなみに訂正で出ているじゃなくて俺が抜き取ってるの」

『駄目だ、こいつ。それより、我の前では吸うな。匂いがつくだろうが！』

「鉄に匂いなんかつくのかよ？」

まあ、匂いが付いたらリセッシュでもかけておいてやるよ。それから、車で使う洗剤で吹いといてやる。

『お主、今馬鹿なこと考えておらんか？』

「気のせいだ」

『ぬづ。お、来たぞ』

すると、向こうのピットから白い機体がやってきた。

ち、イケメンめ。俺のイケメンレーダがピンピンしてるぜ。きっとあの大佐殿もどきとすでにフラグを立てやがったな。

「なあ、アル。火炎放射器ってないか？」

『お主の思考がわかってしまう我が怖い』

『両者位置についてください』

放送が入る。

デモンベインはやはり地上で位置についている。

「ふうー。携帯灰皿を持ち歩いている俺カッコよくね？」

「タバコを吸ってない未成年に問われても困る」

「誰もデメエに言ってるねえよ」

そういつとどこかに灰皿をしまう蛮。ちなみに、今言ったのはアルに向かっただ。

アルとの会話は蛮のみだ。それか、アル自信が回線を開くしかない。

「ッ。あなたが俺の何を気に入らないかは知らないが真剣にやらしてもらっ」

「すべてだ、小僧。ちなみに、真剣なんて軽々使つな。これは、人生の先輩からの教えだ」

「・・・どうも」

『試合開始』

そして、試合が始まった。

「はっはっは。イケメンは消毒だあ~~~~!!」

火炎放射器はなにがそう言わないといけない気がする。

「はああああ!!」

対して一夏は接近戦しかできないためデモンベインとの距離を詰める。

雪片は発動しているだけでエネルギーを消費する欠陥武器だ。現在は通常の状態に収まっている。

「遅いなあ」

『あ、それ』

後ろに体を反り、そのまま回転しながら避ける。
それから、再びセシリアと同じように避けるだけの戦闘が続く。

「くっ、ちゃんと戦えよ！」

一夏はそれに痺れを切らした。

「しゃねえな。ほれ、バルカン」

デモンベインの頭部からバルカンが発射される。相手の機体のことを知らない一夏はこれがあるとは知らずもろに受ける。威力は低いが、零落白夜というエネルギー喰いがあるため効果は少なからずある。

「馬鹿にして!!！」

「感情に流されるとは、未熟！（キリッ）」

『大人げない・・・』

大振りに雪片を振る一夏だが蛭はそれを簡単にも

「我流白刃取り！」

そのまま受け止めた。一夏はまさか受け止められるとは思ってもおらず一瞬の隙が生まれた。蛮はそれを見逃さず、彼の腹に蹴りを入れる。

「ぐはッ！」

勢いで雪片を手放し吹き飛ばす。

「う・・・は、しまった！」

「そういえば、ISの武器は許可を出さないと他人は使えないらしいな。けどな・・・！」

「！」

蛮は奪った雪片で一夏を斬りつけた。

「剣なんて振れば問題ねえの」

「ぐうう！！返せー！！！！」

「そして、剣なんてな」

そう言って雪片を膝で折る。

「折っちまえばただの鉄屑だ」

「テメエええええ!!」

雪片はかつて千冬が使っていたモノだという意識が強い。それが折られ、彼の逆鱗にでも触れたのだろう。だが、蛮にとってはどうでもいいことだ。

「本当、弱いな」

『まったくだ。これでは、先ほどの小娘とのがまだ殺り甲斐があったぞ』

「これこれ、字が違いますぞ」

『対して変わらん』

確かにそうだ。

まあ、イケメンの顔も見たくないのでケリをつけますか。

「アル」

『了解』

向かってくる一夏に対して蛮も走る。
そして。

「とうー!!」

「なに!?!」

接触するギリギリの所で上空へ跳ぶデモンベイン。

「我流!ライダーキック!」

動きを止めた一夏はそのまま攻撃を喰らい続ける。シールドエネルギーがどんどん減っていく。

「ウエーイー!!」

「ぐう!がはー!!!!」

シールドを突破し絶対防御が発動。
白式のエネルギーは0となった。

『勝者 大神蛮』

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じた。
大神蛮の全勝という形で。

「ちなみに、俺はライダーとしては剣フレイドが一番好き」

『また関係ないことを』

第五話 イケメンは消毒だぁ~~~~!! (後書き)

実はこれって手抜きなんだぜ？

今後の展開として鈴がくるのですが彼は基本かかわらないので一気にトーナメント戦に移る可能性が高いんですよね。

いやだって、絡む要素がないんだもん。

絡むと言ったら原作三巻ぐらいか。。。

あ、ラウラは一夏のハーレムに入らないよ！
だって、俺ラウラが好きだもんね！

第六話 疲れた後の一杯は格別だね（前書き）

今回は短いです。それと、幼馴染の葛城唯依なのですが、依をつけるのを忘れていることに気づきさつき訂正しておきました。たぶん、あまり出していないのでどこか治っていないところがあると思いますがスルーしてね！

第六話 疲れた後の一杯は格別だね

模擬戦から数日後。クラス代表はあのイケメンに決定した。なぜか
って？

それは俺が辞退したに決まっているじゃないか。
俺がそんなメンドクサイことをすると思うか？思わないだろう。

で、今日はなにやらその代表に決まったイケメンのパーティーをや
っているらしいのだが俺は行っていない。

実は誘われなかった……。

なんてことはなく、誘われたが断った。だって、俺がイケメンを祝
うか？ありえない。

唯が美少女になるくらいありえない。

それにしても、唯依の奴どうしているだろうか……。

俺が居なくなつて清々しているに違いないな。いい加減、男見つけ
ろってんだ。

俺の世界は一夫多妻制だから問題ない（キリッ）。

って、なんで俺あいつの心配してんだよ。俺だってあいつと別れる
ことができてるんだつうの！

「はぁー……」

つい溜息を吐いてしまった。俺はテーブルの上に置いてある缶ビールに手を伸ばし飲んだ。

「ゴクゴク……ぶっはー！ー！ー！く~~~~」

『まったく、サラリーマンかお前は』

「うるせえな。いいだろうが」

『しょうもない』

図で例えると飲み過ぎている親父を止める妻といったところなのか？

「ところで、戦闘データの蓄積はどうだ？」

『十分、とは言えん。レベルが低すぎる』

「それと、お前が高性能過ぎるのもあるな」

『それもあるが、お主が強すぎると我は思っが？（2828）』

「俺はただの童貞だ」

アルは何やら確信めいたこと言っつが蛮はそれを否定する。
大神蛮。彼は一体何者なのか……。

コンコン

「ん、誰だ？」

ドアノックは確かに自分の部屋だと言っつことはわかる。しかし、俺の部屋に一体誰が来ると言っつのか……。ちよつと考えてみる。

ぼんぼんぼん……ティン！

「いないな」

『いないのかい！』

アルが地味にツツコム。

ビールを片手に重い腰を上げ扉へ向かう。

コンコン

再びノックがされる。

「はいはい。今あけますよーっと……………」

蛮は硬直した。それは、まさか自分の部屋にこの女が訪ねてくるとは思っていなかったからだ。
その人物とは。

「その、こんばんは」

「こんばんは」

一応俺の担任である織斑千冬であった。
驚愕だった。何故？Why？
一体全体どこにそんな要素が？

「で、一体何の用です？」

「いや、その……………謝罪をしようと思ひまして……………」

思ひまして？なんで敬語なんだ？俺いつ、フラグ立てた？むしろ、
最悪だろう。あんなことまでしたんだし。

「その、私はあなたのことを最初は最低で人間として最悪で童貞野

郎と思っていた……ました」

「……………(#)」

ねえ、俺怒っていいよね？

「しかし、先日の模擬戦であなたに対する見方が変わり」

「で？」

「だから、その……すみませんでした」

あの千冬が頭を下げた。

「……………」

ていうか、俺謝られても困るんだけど？
別に俺彼女のことなんてどうでもいいし。

「いや、まあ俺も大人気なかったというし。その、失礼なことを言
つたし」

これは、本心ではある。だって、こんなことを言われたら……………

・あ。

「その、お詫びとい訳ではないのですが晩御飯を一緒に……
っていないじゃないか」

なぜか、目の前に彼の姿はない。辺りを見回してみると。

「真耶ちゅわ~~~~ん」

「あ、大神さん」

びよんびよんと跳ねながら廊下の向こうに何故かいた真耶に向かっていく彼の姿があった。

「これから、食事でもどうだい（キリッ）」

まるで、某シティーハンターみたいなノリだった。

「え、その……私なんかでよろしいのでしょうか？」

何故か顔を赤くする真耶。

「君だから、いいのさ（キラーン）」

「は、はい／＼」

そのまま蛮は真耶の肩に手を回し二人で食堂に向かった。それを、ただ傍観することができなかった千冬はというと。

「……なんだ、この異常なまでに込み上げる殺意は」

その後、真耶は悪夢をみたことをここに記しておく。

第六話 疲れた後の一杯は格別だね（後書き）

これを読んで千冬のフラグ立ったと思ったやつ・・・

残念だったな！！

彼女はヒロインじゃないのだよ！！

まあ、今のところだけ。

原作キャラでヒロインを考えているのは・・・3、4ぐらい？

全部俺の趣味だけだな！！

ただ、とあるキャラは蛮にとある台詞を言わせただけというのもあつたりなかったり。

第七話 大神先生の大人の恋愛講座

童貞 side

クラス代表が決定してからの少しの時間が経った。アレから、イケメンは俺のことを遠からずと睨んでいるようだ。まあ、アレだね。俺が真面目に戦わず、それで負けたから悔しいんだろっね。若いね〜。

まあ、例え何度挑まれようと負ける気はしないね。何故かって？俺がイケメンによって倒されることはないからだ。そして、俺はすべてのブサイクと童貞の友であるところによっておこっ。

さて、今の時間はすでに朝を過ぎている。よって、普通なら授業を受けているんだろうが俺は早速一時間目からサボっている。

だって、つまらないんだもん。まあ、実技なら出てもいいかなあと思ったけど……

この間の専用機持ちによる実技

「よし、今回は急上昇と急降下の訓練をする」

と、あのブラコン教師が指示を出す。専用機持ちということになっているので当然俺もやるのだが……。

ブラコンの合図でイケメンと大佐殿もどきは飛び立った。あ、大佐殿もどきは結局何にも進展はないよ？だって、あのイケメンによって落されたんだもん（恋的な意味で）

「大神……殿。なぜ、飛ばないのですか？」

そして、何故か敬語。何があったし。

「ん？だって、俺飛ばないもん」

『跳べるがな』

間際らしいよね。

「は？」

「だから、飛ばないんだって」

「……わかりました」

俺がそういつと周りの小娘共がデモンベインのことを。

『欠陥品』 『本当にIS？』 『出来損ない』 『おっさんにはきついよ』

とか言っているのだが。

『今欠陥品って言った小娘出てこんかい！！』

まあ。アルが反応しているのだが。しかし、俺は大人なのでスルー。それに、あとで飛べるし。まだ。術式が完成してないってウエストが言ってた。

で、俺は待っている間暇なので、宙に浮かんで寝っころがっていた。

「飛べるだ・・・じゃないですか」

「これは、次元連結システムの応用だ」

「・・・」

「まあ、飛べないだけで跳べるだけだな」

「・・・」

わからないか。まあ、仕方がない。そして、上にいる二人が急降下

をする。大佐殿もどきは普通に降りたがイケメンはそのまま地上に
激突。

「ざまｗｗｗｗｗｗｗｗ！！！！」

俺は盛大に笑ってやった。痛い視線がいくつか向けられたが。
次に行ったのが武器の展開。
しかし、ここでも俺は。

「武器？んなもんねえ」

固定武装しかないためデモンベインは出すモノがない。
それを聞いて再び小娘共が陰口を言っていたのだが、まさかアルが
切れて。

ヒュン！　パスッ！

一人の小娘の足元にバルカンが一発放たれた。
しかも、器用なことに発砲音を出さなかった。

「（お前流石にそれはやめろって。俺が被害受けんだぞ！！）」

『知るか！我を侮辱した当然の報いなのだ！』

本当に餓鬼でした。

とまあ、こんな感じで授業なんて出れる訳もなく俺はこうしてサボっているわけなのだ。

「空が綺麗だ……」

『そうだなあ……』

大人が屋上のタンクの上で仰向けになり、その隣に本が置いて喋っているのだ。

『なあ、蛮』

「なんだよ、アル」

ふとアルが何かを言いだした。

『体が欲しいのう』

「……ウエストに相談だ」

『何その、牛乳に相談のCMみたいなノリは』

「だってなあ……ん？」

すると誰かが屋上にやってきた。

「アレは……ポニーテール」

ぶつちやけ名前覚えていないんだな、これが。

End

ポニーテールside

今日、噂で隣のクラスの二組に転校生が来たらしい。別に、それは構わない。だが、その相手が問題だった。

一夏はそいつをセカンド幼馴染と言っていた。

そのあと色々あって、部屋を巡ったり、酢豚とか酢豚とか酢豚とか……。

変な約束までしおって！

まあ、アレはあいつに同情する。アレは完全に一夏が悪い。

「はあ」

なんで、あいつはあんなにも鈍感なんだ。それでいて、無意識に女を落している。

・・・よく考えたら最低だ。

「あいつは、なんでああなんだ」

「ほー、何やら恋の悩みとみた」

「誰だ！」

いきなり声をかけられ？私は咄嗟に当たりを見回した。

「ここだ、ここ」

声の方向に体を向けるとそこには・・・あのいけ好かない年増がいた。

End

「どうやら、恋で悩んでいるとみた」

「あなたには関係ない」

連れないね〜。

「まあ、相手はあの林念仁じゃなあ」

「あなたに何がわかる?!」

「わかるよ。俺の恋愛アンテナがピンピン立ってる」

例えるなら妖怪アンテナ的なアレだ。

「とりあえず、あのイケメンと付き合いたいなら早くした方がいいぞ」

「それはどういふことだ?」

「お前もわかっていると思うが、あいつは無意識に女を落とす最低の男だ」

「それは、同意する」

うん。それは否定できないからな。

「男女共に鈍感はいけない。そうだな、自分を第三者としてあいつを見てみる。あいつは、どんどん無意識に女を落していく。どう思う？」

「それは・・・やっぱり最低だと思っ」

「だろ？つまり、誰かが止めなければいけない。それが、お前だ」

私を指名してきた、

「わ、私?!」

「そうだ。とにかく誰かが止めなければならぬ」

「し、しかしどうしたら」

気付けば篝・・・ポニーは蛮の話術に乗せられていた。

「簡単だ。ふうー」

一度煙草を吸ってはいた。

「既成事実だ」

「き、既成事実?!」

「そつだ。あいゆうどうしようもない男は自覚させるか、世論を味方にすれば簡単に落ちる」

「し、しかしどうしたら・・・」

「簡単だ、寝ろ」

「ね、ねねねね!!!」

「これが一番効果的だ。寝るだけじゃだめだな。せめて裸になって寝てる。そうすれば、既成事実のできあがりだ」

「な、なるほど」

「わかつたらなら、早速実践しろ。早くしないと他の女に盗られるぞ」

「あ、ありがとうございます!」

そう言つて、ポニーは去つていった。

「・・・恋か。もう、そんなものどこかに捨てちまつたぜ」

蛮は中二病発言をした。それもさりと。

『イタタタタ！！』

「燃やすぞ、テメエ！！！」

アルを持ち上げ、そのままライターを寄せる。

『やめんか、この戯け！！』

「んだと?!」

『やるか?!』

人と本が喧嘩する奇妙な光景が繰り広げられていた。

「にしても、ポニーテールか……。絶滅危惧種だよな」

『お前は突然何を言いだす』

「そういえば、ポニーっていいよなって言ったら唯依の奴翌日ポニーにしたっけ。まあ、全然可愛くなかったが」

『唯依とは誰だ?』

「ポニー」

アルには相変わらずのスルーだった。ちなみに、唯依は美少女なのでポニーにしたら男性には大好評だったとか。一応、言っておくが壱は唯依を美少女だとは認めていないので。ここ、テストに出るよ!

「ポニー……(きつと、夜な夜な馬のマスクをかぶったポニー男がブラシを持って高校生を無理やりポニーテールにする輩が現れるに違いない)」

『ポニー?』

「あ、後で瑠璃の髪型ポニーにしてみよう!」

『小娘も大変だな……』

こうして、壱は再び授業をサボるのであった

「そういえば、なんかトーナメント戦ってのがあるらしいぞ」

『ま、我には関係ないがな』

「だよな~~~~(^o^)」

第七話 大神先生の大人の恋愛講座（後書き）

あの役を箒にしたのはただ単に適任だっただけなのだ。

別にこれでイケメンのルートが単一になったわけじゃないのだ！！

で、次回で一巻分が終わりという超ハイスピードさらに急展開。

君はついてこれることができるか………？

あと、原作ヒロイン。今のところ一人なんだけど、知りたい方拳手！

そして、次回はなんと蛭が……

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ・・・一割くらいな(前書き)

更新が遅れて申し訳ない。文化祭などで忙しくてなかなかネットをする暇がなかったのだ。

ちょっとシリアス

そして、やっとあいつが登場・・・!?

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ……一割くらいな

トーナメント翌日。

おや、気付いたらもうトーナメント始まっているではないか。これが、噂に聞くご都合主義というやつか。

「さて、あのイケメンを倒してくれる相手は誰かな……」

対戦表が表示されている掲示板をみるとそこには織斑一夏VS凰鈴音とあった。

鈴音？中国人か。チャイニーズ！

「ん!?!」

しかし、なぜだ。俺の恋愛アンテナがピンピンと何かを感じている……。
は！もしや、またイケメンに……。
け、これだからイケメンは嫌いなんだ。

『おい、蛮。あのイケメンの対戦相手のISなんて呼ぶと思っつ〜』

「ん？えーと、こう・・・りゆうじゃないのか？」

『ふふーん。シエンロンって言うらしいぞ？』

「神龍？！ワロスｗｗｗｗ。願い事でも叶えてくれるってか（笑）」

まあ、その割にはあんま強そうに見えないな。
なにか、金色のオーラを纏って道着に亀つてあつたら強そうにみえるけどな。界だと期間限定で強くなれるが。

『それでは、試合開始』

気付けばすでに試合が始まった。

俺は一応アリーナに赴いているが一人で出入口近くの壁におっかかりタバコを吸いながら試合を見ている。

「（ヒソヒソ・・・）」

しかし、相変わらず嫌われているねエ。ちらちらと俺の方を見ている。

餓鬼には興味ないからどうでもいいんだけどさ。

『にしても、お遊びだ。まだ、軍の合同演習のが楽しいぞ』

「軍かぁ……。懐かしいな」

『そういえば、お主は何かのテストパイロットをしていたと言っておったな？』

中二病ではなく、これはガチだったりする。

「昔の話だ、昔の」

まあ、この世界に来てからの俺の日常は30歳になってからのようなものだ。この場合転生ではなく、違う世界にいる自分に憑依したことになるのか？

まあ、俺の歩んでいた歴史はある程度同じだ。ただ、俺のいた世界に霸道財閥とISをぶちこんだ感じだ。

『にしても、あのツインテールは動きがそれなりにできているな』

「イケメンは糞だけどだな。そもそも、武器が刀とかどうみても玄人専用だろうが。ていうか治ったんだ、アレ。結構本気で折ったりしたんだけどw」

『まあ、アレだな。主人公補正という奴だな』

「嫌だね、そういうのは。で、ここからマジな話なんだけどさ」

『む、なんだ？』

「そろそろ、武器欲しくない？」

『それは、言えている』

いや、描写とか戦闘が格闘戦だけがつまらなくなっただって訳じゃないんだよ？

『一応、私の術式の一部がすでに完成しつつあると言っておったからなあ奴は』

「ウエストか。たまに、あいつの破壊ロボに乗りてえんだよな」

え、ISサイズじゃないよ。実物だよ？あのドリルがいいんだよなあ。

『（あと、私のアレも頼んでおくとしよう。うん、そうしよう）』

アルもアルで何か企んでいるようである。

「はあく、眠む……ん？なんだ、アレ」

欠伸をして上を見上げたら何か落ちてくるんだけど。

「まさか、俺の下に謎のロボットと美少女が遂に!」

『この浮気者め!』

ひゅ~~~~ドーン~~~~!!

それは、アリーナのシールドを通って乱入してきた。砂埃が晴れるとそこにはISがいた。

「なんだ、ISか……」

『どんだけ残念なんだ、お前は?!』

「美少女……」

『我がいるだろう!』

「(~~~~)」

『~~~~』

確かにアルは、人になれば確かに美少女？だろう。しかし、今は・・・本。本なのである。

『生徒の皆さんは至急避難してください！！繰り返します・・・』

『きゃあああああ』

「なんていう、お約束」

周りの女は逃げているが俺は逃げない。だって、逃げたら逆に危ないってフラグがあるだろう？

「さて、有能なアル君？あのISの解析はどうかね？」

『アレか？アレには生体反応がないぞ』

「無人兵器か」

しかし、無人機にしてはダサイよな。MDとかの格好いい。Wでふと思った。無人機はよくない。

「これでは、ゲームだ（キリッ）」

『・・・』

「エレガントではないな（キリッ）」

『お前には無理だ』

「そっか・・・」

閣下、やっぱりカッコイイよ。俺も閣下の下で働きたい。警備員とか最適だよな。自宅警備員とか。

『お、小娘共が動くぞ』

「・・・ドツカーン、ひゅーん、ズバーン!!」

『なぜに効果音?』

実際その通りに敵は倒れた。

『やったか?!』

イケメンが言っているがそれはやってない。

「もう、帰る・・・!!」

『蛮!』

「ああ・・・来る」

俺は再び空を見上げる。そして、また何かが落ちてくる。それは、ISではない。
それは、シールドを突き破りそのまま中破したISに“寄生”した。
アレは・・・。

「降魔」

『まさか、本当に・・・』

「いくぞ、アル！」

『応!!』

蛮は鎧を纏い、跳んだ。敵を倒すべく。

イクメンside

最近ろくなことばかり起こる。セシリアに絡まれたり、おっさんに

は嫌われるし、鈴が来たらなんか喧嘩になる。
本当に最悪だ。

とにかく、トーナメント戦では鈴と仲直りしようと思ったら逆効果
だった。

鈴は強かった。

俺も甘かったと思った。おっさんに負けてイライラしていたのは確
かだ。けど、自惚れていたのかもしれない。

そんな時、いきなり変なISが乱入してきた。

あとで、俺達はそれが無人機だとわかり破壊しようとした。なんと
か、機能を停止ができたと思ったら振ってきた何かと合体？した。

「なによ、アレ」

「気持ち悪いな」

そう、気持ち悪い。まるで、生物と機械が混ざったような……。

「キアアアアアアアアアア!!!」

そして、そいつは叫びだした。

同時に、上から声が響いた。

「アトランティス・ストライク!!」

シールドを突破し現れたのは……おっさんだった。

End

「大神蛮……推参」

「キアアアア!!」

目の前にいるISはすでにISではない。失った右腕は奴の腕に。所々あいつの肉体が飛び出ており、頭部は気持ち悪い顔をしている。

「寄生……。完全ではないな」

かつて、機械に降魔を動力源として動かしていたと聞いていたがこれはまた別の形だな。

「おっさん、なんで」

「……………」

「誰、こいつ？」

「おい、無視する　ぐう！！」

一夏は突然彼に腹に蹴りをくらい気絶した。

「ちよ、あんた何してんのよ！」

「五月蠅い餓鬼を黙らしたただけだ。とつとと連れて逃げる」

「は？なんで、逃げるのよ。また、あいつを」

「なら、その自信に溺れて死ね」

「なによ、あん……………！？」

突如、降魔の右腕が彼に向かって伸びてきた。

それは、速く鈴に向かって伸びる。しかし、それは届くことがない。デモンベインの手刀によって切断されたからだ。

「ち、血？」

「今日の俺はマジだぜ……………一割だがな」

今の彼には甘さはない。それは、自らの使命を果たすためだ。

『どうする？すでに、映像は残っているぞ』

「解析されても困る」

『なら、やるのだな？』

「ああ。術式解凍！」

『応！ナアカルコード入力、術式解凍！』

蛮は右腕を翳す。同時に、背後に魔術術式が展開される。

「光差す世界に、汝ら暗黒住まう場所なし！乾かず餓えず無に還れ
！」

デモンベインは突撃する。機体のあちこちから降魔の触手が迫る。デモンベインはそれを俊敏なフットワークで避け接近する。そして、互いの距離が零になり。その右掌を突き出す。

「レムリア・インパクトーーーーー！！！！」

刹那、降魔を巨大な光が包む。

『昇華！』

デモンベインはそのまま離脱。そして、光が収束し降魔ごと消滅。降魔がいた場所には小さなクレータしか残っていなかった。すべてを消滅させた。

デモンベインは、気付けば高い塔に立っていて腕を組んでいた。

「降魔、また世に現れる。か」

『どつする、止めるか？』

「まさか、自分の使命を果たさず。それに、俺達は魔を断つ剣。だる？」

『ふ、その通りだな。我は、汝の剣であり盾。汝は我が護る』

「頼むぜ、相棒」

『ああ、マスター』

【大神】それは、かつて世界を影で救ってきた英雄の名。

【デモンベイン】それは、魔を断つ剣

【大神蛮】それは、英雄と破邪の血を受け継ぎ現代に存在する魔を断つ剣

大神蛮とアル・アジフがいる限り、この世に悪が栄えたためしはない。

「というわけで、今日から【魔を断つ蛮】と名乗るかな」

『じゃあ、その前は？』

「高校生な蛮だ」

『まんまじゃな』

霸道邸

「はい、わかりましたわ。ええ、それではおやすみなさい。蛮」

受話器を置き深く椅子に腰かける瑠璃。

「蛮様からでしたか？」

「ええ、降魔が現れたそうです」

「そうですか。とうとう、現れてしまいましたね」

「かつて大正の時代に現れそして消えて行った魔物」

今では知る者はおらず、文献も残っていないのだ。

「魔からこの日本を護ってきた蛮のお爺様。一郎おじ様はやはり予期していたのかしら？」

「そうでしょう。蛮様の両親の死も関わっているという情報もありました」

「しかし、一郎おじ様もさくらおば様もあの方たちもお亡くなりになってしまった今。戦えるのは蛮のみ」

「では、フランスとアメリカそれに賢人機関に連絡をした方が」

「ええ。お願いウインフィールド」

「畏まりました」

「ああそれと」

部屋を出ていく彼を瑠璃は引き留めた。

「フランス行きチケットを用意してくださいね」

「なるほど。アイリス様の下へ」

「蛮は預けていたモノを取りに行くそうです」

「そうですか。お嬢様、思い出したのですが彼女達にも一応連絡を」
「ピク」

それを聞くと瑠璃の耳が反応した。

「いけません！彼女達にそんなことを言ったらすぐさま壺の所に来るに違いありません！」

「あの、お嬢様・・・」

「何故かは知りませんが皆おば様たちの生き写しのような顔でさらに同じ名前を貰っているのですよ?!」

「は、はあ……。しかし、神崎重工……。すみれ殿には一応あの件もありますしお伝えした方が・・・」

「ッ。それは、確かに仕方ありませんけど。。。そこは、ウインフィールドに任せます!!! いいですね!!!???」

「は、はい!!」

ウインフィールドかつてない彼女の怒りに震えた。

その夜、瑠璃は自分のベッドで壺くん人形を一晚投げては蹴っていたという・・・。

IS学園 地下室

IS学園にある地下室のモニタールームで千冬と真耶は先の戦闘の映像を見ていたのだが……。

「なぜだ！なぜ、あの時の映像だけない！？」

「わかりません……。綺麗さっぱり消されています」

そう。何者かによってデモンベインと降魔との戦闘の映像だけ存在しないのだ。

「大神殿……。ああ、大神は何も言わんし。一体何なのだ！？」

「あの、先輩。落ち着いて……。はい、これコーヒーです」

「塩が入っていないだろうな？」

「ぎく」

「……真耶」

「ひ~~~~~!!!」

その夜、真耶の断末魔が人知れず響いていたという。

その頃霸道財閥地下研究所

「ふっふっふ。吾輩にかかればIS学園のプロテクトなお茶の子
さいさいなのである！」

ギターを弾きながらモニターの前で興奮しているキチガイが一人
いた。

「博士何パソコンの前でニヤついてるロボか？正直言ってキモい
ロボ。AVを見て興奮してる中学生ロボ」

とそこに何故かロボと語尾につけるロボっ子が現れた。

「ヤメテ！そんな幼気な少年をみるような目で私を見ないで！！」

「博士、黙れロボ」

「エルザが〜エルザが冷たい〜」

「はあ、こんなことならダーリンと一緒に学園にいけばよかったロボ」

「そういえば、蛮がフランスから帰った後こっちに来ると言っていたぞ？」

「いきなり、真面目モードに入らないで欲しいロボ」

「さて、奴に頼まれていた武器と術式を完成させるか」

「あー、勝手に振っておいてこれはないロボ。ダーリン、エルザ寂しくて死んでしまうかもロボ」

そう、彼こそ蛮が神に頼んだ男ドクターウエスト。
とその助手のエルザである。

ぶっちゃけ、やっとご登場である。

「けど、今回はこれだけロボ」

「なにですか?..!」

第八話 今日の俺はちょっとだけ本気だぜ・・・一割くらいな(後書き)

この作品はサクラ大戦のその後のifの話なんだよ!!

な、なんだってー！！！！

て、声が聞こえそうだ。

今回シリアスだったけど、この作品は8対2の割合でシリアスが2なのでご安心を。

それと、オリヒロインというわけではありませんがサクラ大戦のヒロインたちの孫がいつか登場します。

名前を考えるのが面倒なのでそのまま瓜二つという設定です。そっ
ち方が皆様の想像力が膨らむでしょう2828

ちなみに、私は3が大好きなので巴里勢を鼻屑してまいります許
してね!

あとフランスに行くからってどっかの量産機の企業の隠し子との出
会いがあると思ったら大間違いだ!!

代わりにロリが出るよ!!

第九話 さて、フランスにやってきました。フラグを立てると思ったら大間違

今回とある原作キャラが登場します。

まあ、こんな風になっていても不思議じゃないって感じがするあの子です。

第九話 さて、フランスにやってきました。フラグを立てると思ったら大間違い

やあ、平民諸君ごきげんよう。ただいま、日本からフランスにやってきた大神蛮だ。

ちなみに今の通り名は『魔を断つ蛮』で通ってる。

さて。今の俺は空港を後にし、レンタカーである場所に向かっていく。

本当なら巴里にでも行ってパリジェンヌとお茶でもしたいところなんだが瑠璃が駄目って言うんだぜ？

しかも、“シャノワール”にも言っちゃダメっていうしさあ。まあ、言ったら何かを失いそうで怖いんだがな……（童貞的な意味で）

けど、時間も限られているのも理由の一つだ。

『で、フランスに何しに来たのだ？』

何も知らないアルは蛮に聞いた。

「ああ、お前は知らないんだったな。俺の爺さんと婆さんのまあ、

形見かな？それを、フランスにいる知人に預けてあるんだ」

『何故だ？本来ならばお前が貰うべきものだろう？』

「ちょっと訳ありなんだよ」

『とういうことは相手は年寄りか。なら、問題ないな（ニコニコ）』

「年寄り、ねえ・・・」

アレを年寄りと言うなら人類はとくに不老の薬を見つけている違いないよな・・・。

言葉に出さず、心の中でそっとしまい俺は目的に向かって車を走らせた。

「さて、着いた」

『お、おお〜』

辿りついた場所を見てアルは意外にも驚いた。いや、驚かさせられ

たと言えはいいのかもしれない。なぜなら、その場所は目の前には広がる湖！さらに、ここ一体を自分のもと言わんばかりの象徴である……城が立っているのだ……。

城門が開き、蛮は車を進める。入口の前まで持つていきそこで降りる。

そこには赤絨毯が敷かれその横にはメイド、メイド。ずらりとメイドが並んでいた。

「……………メイドさんキターーーーー！！！！」

『さっきまでのカツコイイ顔が台無しじゃな』

そんな二人……？の前にメイド長と思わしき人物が現れる。

「お待ちしておりました、蛮様。さあ、どうぞこちらに」

「ありがとうございます。で、このあと一緒にティータイムでも」

さっそくナンパしていた。

意外にも周りのメイドも羨ましいそうに見えるのはなぜだろう……。そして、このメイド長も顔が少し赤い……。

「大変嬉しいのですが……」

「ですが？」

「さっそくナンパなんてまったく。童貞の癖に生意気だよ、蛮ちゃん」

「誰が童貞だあ???!」

童貞と言われガンを飛ばすがそこにはメイドしかいない。そして、すぐに平静に戻り視線を下に向ける。

「や、久しぶりだね。蛮ちゃん」

「あ、アイリスお姉さん」お姉さん」・・・アイリスお姉様お久しぶりです」

「素直な子は好きだよ？」

そこには、どうみても二けたに満たない幼女がいた。

アイリス・シャトーブリアン。愛称アイリス。

実年齢ぴく歳。かつて、大正の時代、大帝国劇場、帝国歌劇団・花組の一人として幼い頃から舞台に立っていた。

しかし、その実態は魔から帝都を守る帝国華撃団の一人。その群を抜いた霊力は花組の一だった。そして、年を追うごとに他の隊員は

霊力が弱まったが彼女は弱まることはなかった。そのため、霊力の応用でそれ相応の年齢なのだが霊力で身体は幼少のころでその若さを保っていると言つまさに、ロリババアなのである！

ていうか、霊力って便利だね！

「にしても、少し見ないうちにちょっと老けたね」

現在、城のテラスでティータイム中である。

「もう、30歳です」

「まだ、30じゃない」

「・・・・・・・・」

『まさに摩訶不思議じゃな』

「（お前も人の事言えないけどな・・・）」

まあ、実際アルは4千年生きてるからなあ・・・。どういう経緯で霸道財閥に来たかは不明。で、デモンベインを無理やり入れた感じなのだが・・・。

この世界はごっちゃだからな・・・。

「で、降魔が現れたんだってね」

「はい。だから、預かってもらっているアレを取りに来ました」

「だと思っただよ」

テーブルの上に置いてあった鐘でメイドを呼んだ。少し経ったあと長いケースを持って来た。

それをアイリスが開けるとそこには二刀の刀があった。

「神刀滅却と霊剣荒鷹。お兄ちゃんとさくらの愛刀……。これを持つのは蛮ちゃんが一番相応しいとやっぱり思っよ」

俺は二刀の刀を持つ。まあ、形見と云えばいいのかどうかはわからない。けど、これは確かに俺の刀だ。爺さんと婆さんの意思と使命を継いだ俺の……。

「それと、これ」

そう言っってアイリスお姉様から差し出されたのは二挺の大型自動拳銃と回転式拳銃だった。

「これって、もしかして」

「うん。マリアがもしかしたら必要になるって思ってたんだけど、色々技術の塊で弾がなくても霊力を通せば撃てるらしいし、加護とか色々あって……」

しかし、これはどうみても原作に出てくるネロの魔銃なんだよな……。
後のデモンベインの主兵装ともいえる武器で、クトウグアとイタクアを使うためにまあ媒介？制御装置？みたいな役割を果たすのだから、なんだかねでこっちの名前が定着している。けど、丁度いい土産が手に入った。

「……重いな」

「けど、マリア曰く世界最強の銃よ。らしいけど？」

だろうね。アルの術式にはこの二挺拳銃はないから丁度良かったと言えばよかったが……。

「で、孫のマリアは今どこ？」

そう、マリアおば……お姉さんの孫はあの人にそっくりで。ていうか、爺さんの知り合いの女性の大半の孫は瓜二つで皆名前を譲り受けている。

遺伝子って怖い。

「今シャノワールで働いているよ。でも、マリアちゃんってISの国家代表だったんでしょ？」

「ああ、そうなんだっけ？俺あいつが国家代表って風の噂程度しか知らなかった」

なんでも、第一回と第二回連続出場で射撃部門は連続一位だったらしい。

「なんで？連絡来なかったの？」

「いや、マリアだけじゃなくてあいつらがしょっちゅう連絡超越すから携帯変えた」

「いけないよ、女の子はデリケートなんだから」

デリケートね。皆、個性が強いから全然そうは思わないけど。

「まあ、考えとく。アル、こいつらを収納しておいてくれ」

『うぬ』

すると、刀と銃は粒子となり本に吸い込まれた。

「へー、これが壘ちゃんなの？」

「自称4年千生きた魔道書だったよ」

『自称じゃないわ！』

「わあ、喋るんだ！」

「アルが自分で意識すればな。普段は俺としか会話できないようになってる」

『ふん。こやつは我が相手しないと寂しくて死んでしまうからな』

「俺は兎か。とにかく、アイリスお姉様ありがとう」

「もういくの？」

「ああ、色々と忙しいし」

「そっか」

俺は紅茶を飲み干し、アルを抱えてテラスを出ようとしたがそこで彼女に止められた。

「壘ちゃん。なんで、降魔が現れたかはわからないけど頑張つて。壘ちゃんは、お兄ちゃんとさくらと・・・私達の孫なんだから！」

それを聞いて蛮はふっと笑みを零した。

「当たり前だ。あんだだけ弄られたんだ、負けたら怒られちまう」

「ふふ、そうだね。あ、アルちゃん借りていい？」

「なんで？」

「いいから。その間に車で待ってて」

「?・・・わかった」

蛮はそう言ってアルを渡し、車を出しに行った。

残されたアルはアイリスに抱えられたままゆっくりと玄関へ目指す。

『どうしたのだ?』

「うんと、ちょっとお話したくてね。蛮ちゃんと出会ってどのくらいなの?」

『うぬ・・・数年は経つな。それでも、あいつのことはわかっているつもりだ』

「そっか。蛮ちゃん、アレでも結構個性強いから」

『わかっておる。なんだかんだで、あいつは素直だ』

「ふふ、そつだね」

『どこころで、我からも一ついいか?』

「ん、なに?」

『唯依という名前を知っておるか?』

アルは度々蛮が唯依という名前を口ずさむのを知っている。だが、その名を持つ人間にあったことがないのだ。だから、旧知の中である彼女なら知っていると思っただのだ。

「ん、聞いたことあるんだけど。でも、知らないな。何、その子蛮ちゃんの彼女?」

『いや、あいつは常に童貞だ』

「そつだよね」

彼女達は知らないのだ。この世界に【葛城唯依】の存在はない。ただ、蛮だけは知っている。覚えているのだ。

『では、誰なのだ?』

「ん、まあ大丈夫じゃない?だって、蛮ちゃんだよ?」

『うぬ・・・それもそうだな』

二人はそれほど大きな問題ではないと思いきこの話はきりあげた。そのまま、二人は玄関までいくと蛭がすでに車を回していた。

「はい」

「どうも。で、何を話したんだ？」

「秘密」

「さいですか。それじゃあ、いくよ」

「うん、気を付けて」

「ああ」

軽いあいさつを交わし蛭は車を走らせた。

近くでみると大きかった城がだんだんと遠ざかっていく。

そして、城が完全に見えなくなるぐらいになりアルが蛭にあることを聞いた。

『ところで蛭』

「なんだ？」

『実は、最初から聞こうと思っていたのだがな？』

「ああ」

『なぜ、タキシードなのだ？』

「いや、私服なんだけど」

『その帽子もか？』

「ああ」

そう、タキシードに謎の帽子。
明らかに私服ではない。ないのだが……

『（こやつセンスはわからん）』

第九話 さて、フランスにやってきました。フラグを立てると思ったら大間違い

アイリス登場！！

うん、靈力の応用でエターナルロリになっけていても不思議じゃないと思う。

あと、名前だけで出たマリア。いま、シャノワールにいる設定です。ネタバレになりますが、帝都組はマリア、アイリス（ヒロインではない）神崎重工の名前は出たけどすみれば出すか未定。

巴里組はエリカ、グリシーヌ、・・・ロベリアは性格を考えたら結果。一郎以外を好きにならないと思う。まあ、それを言っちゃうと他のヒロインたちもそうなんです。

そこは、ご都合主義ってやつで！！

コクリコはアイリスと同じ扱いでいこうかなと思っている。あと、花火は好きなんだけど機体とかヒロインのバランスを考えると・・・

ぶっちゃけ中距離と遠距離型に偏ってしまう・・・。

まとめると、帝都ですみね。巴里で花火が出るか出ないかです。

そして、オリジナルというわけではありませんがガンソードの設定も一部入っているということ、まだ感想であの存在からしてエロのファサリナさんの登場を考えております！！

蛮、童貞の危機！！

で、ここで問題なのが。彼女の学年。教師でもいいけどやっぱり生徒がいいよね！三年が妥当だけどここはあえての一年か・・・。

というわけで、これアンケートにします！！

（本当はたまには感想が多くほしいとは言えない・・・

登場時期は二巻と三巻の間かな？

というわけで、次回もよろしく！

第十話 ぬッはっははータイトルジャックなのであるー！ーでも、させねーロキ

ウエストのしゃべり方が途中変になったりそうじゃなかったりする
のは仕方がないのだ・・・。

第十話　ぬツはっははータイトルジャックなのであるー！でも、させねーロギ

霸道邸　地下研究所

霸道邸には地下施設が多く存在する。地下にプールがあったり、銃器がずらりと並んでいた入り、射撃訓練場があったり、破壊ロボシリーズがあったりと……。

そんなところに研究所が一つ。

一人の童貞がその門を開けた。

「うわ~~~~ん。西えも~~~~ん!~!」

「どうしたんだい、蛮くん?」

「また、ジャイアン（イケメン）とスネ夫（美少女じゃない女）が苛めるんだよ。アルには武器がないって馬鹿にするんだあ」

「まったく、しょうがないなあ蛮くんは」

「え、何か道具があるの?!」

「そうだなあ、ついさっきできたこの『バルザイの偃月刀』なんて

「どうだい？」

それを、ひょいっと白衣のポケットから出した西えもん。それは、その名の通り偃月刀であった。分厚く、投擲もできる形をしている。だが、これで何かが斬れるとは最初誰も思わないだろう。

「わあ、凄いね！さすが、西えもん。そんなドラえもんごっこをやつて楽しいロボか、ダーリン？」 『空気嫁よ』

「嫁?!」

「そこには反応するんだな」

大の大人が何かのドラえもんごっこする様子に吐き気がするところにやっと杭を打ったのは助手であるエルザであった。

「もう、そんな言葉でプロポーズだなんて。ダーリンも隅に置けないロボ」

そう言つて腕を組んでくるエルザ。

「ええい。離せ、エルザ！俺はお前のダーリンじゃねえ！」

「蛮、貴様！エルザはやらんぞ！」

「お前も黙ってる!」

「でも、まずはシートから」

『駄目だ、これは』

少々お待ちください……

もうちょっとお待ちください……

カップラーメンでも作ってお待ちください……

「で、頼んでおいたものは？」

『やっと戻ったな』

「まずは、さっきのバルザイの偃月刀。武装はそれだけだ。あと、補助武装としては『アトラック・ナチャ』『ニトクリスの鏡』になるな」

ウエストは片手でパネルを打ち、データを表示していく。

「(ド・マリニーの時計はまだ無理か)」

あれは、時間を操る程度のレベルの問題じゃない。時間を巻き戻すことだってできるし、それに無かったことを有ったことに。有ったことを無かったことにもできる。ぶっちゃけチート。

「ああ、アレもあった。アル出してくれ」

『うぬ』

近くにあった机の上に日本刀が二本と銃が二挺現れた。

「まず、この銃をデモンベインの専用武装にセッティングしてくれ。付け加えて、例の術式の媒介としてもな」

「なるほどな。確かにアレは、威力が高すぎる。丁度いい掘り出し物だ」

早速作業に取り掛かるウエスト。

「で、この刀もか？」

「いや、ただデモンベインが使用するときこそれ用に調節できるようにしてくれればいい」

「わかったのだ。ああ、それとデモンベインの霊力回路の準備が整ったぞ」

「お、やっとか」

霊力回路。ゲームを知っている者ならわかると思うがデモンベインは魔術師と魔導書が必要とする機体だ。

しかし、蛮には魔力はたったの30MPだけだ。だが、彼には霊力があるのだ。それで、今までデモンベインを動かしていたのだ。そ

れでも、半分はアルの補助とシステムのバックアップもあったのだが。。
それでも、あそこまでの動きを見せたのは蛮の力の一部と言う事もできるだろう。

「では、アル・アジフを貸してもらおう」

「ほれ」

本をウエエストに託し俺は用がないので瑠璃の顔でも見に行った。しかし、まさかアルがあんなことになるとはこの時思ってもいなかった。

『くっくく。遂にこの時がきた!!』

「まずは、これになるが本当にいいのか?」

『応---ずばつとやってくれ!!』

「そついつなら思う存分やらせて貰おう!!..さあ、痛くないでちゅからね~~~~」

『お、おい・・・なんでドリルなんか。ていうかハンマーとかいら

』

「おお、アル・アジフ。死んでしまつとは情けない、ロボ」

蛮が去った研究所では、一人の少女？の断末魔が聞こえていたとかないとか。

霸道邸 庭園

上に戻った蛮は瑠璃と一緒にティータイムを楽しんでいた。

「で、どうですか。学園は？」

「イケメンはいるし、美少女はいないし。死にそーだ」

「そう……」

しかし、瑠璃の顔は険しい。

「でも、この山田真耶という先生には態度がまるっきし違いますわね」

「（ギク！）ヤーだな。何を言っているだい、瑠璃？」

「真耶ちゃんとか言いながら肩を抱いてますわね」

「H A H A H A H A H A」

「ギロ！！」

「.（。：。）」

「まったく。あなたと言う人は. . . .」

まあ、でも。私のが上ですわ（胸的な意味で）

「まあ、いいじゃねえか」

「よくありません！あなたは意外と.その.モテるんですから」

「は？俺がモテる？アリエナイ、ありえない。アリエナイザーが現れるくらいありえない」

「（あなたは気付いていないだけです！）」

確かに蛭は知らない者がみればおっさんだ。しかし、蛭は特殊な人間にはよくモテるということを瑠璃は知っている。

一般人にはわからないが、特殊な人間は彼に引きつけられるのだ。

特にフランスにいる女とか、メイドとか、宇宙人とか、魔神とか、天使とか、悪魔とか邪神とか……。

つまり、人外と年上の女性にはモテる。子供には彼の良さはわからないと瑠璃は思っている。

「しかし、瑠璃。今日はポニーテールなんだな」

「！」

今更ながら蛮は今日の瑠璃の髪型がそれだと気付いた。

「それは……あなたが、ポニーが好きだからと……」

「ああ、似合ってるぞ」

「……………ありがとうございます／＼」

瑠璃は顔を伏せながらそう言った。しかし、蛮には彼女が赤くなっているのは見えていなかった。

「お前もいい年なんだから男を見つけたらどうだ？」

しかし、そんないい雰囲気もすぐにぶち壊した。

「……じゃあ、もし私が連れて来たらその人との結婚認めるんですか？」

「俺を倒せたら認めてやる」

「じゃあ、いいです」

「頑張つて見つける」

「では、蛮がいいです」

「妹で」

「……私じゃ」

「は？」

瑠璃は椅子から立ち上がり、蛮の上に乗る。傍から見れば抱き合っているようにも見えなくはない。

「私では、駄目ですか？」

「瑠璃……」

ねえ、蛮はなんでお世辞とか言えないの？

お前は美少女じゃないからだ（エッヘン！）

懐かしい記憶が思い出された。よく、言ってたっけ。お世辞の一言も言わない俺に唯依が聞いてきたら俺はいつもそう返していた。

「ま、まあ、お前が美少女になったら考えてもやってもいいけど」

「じゃあ、あなたが言う美少女はどんな人ですか?!」

「えーと、黒髪ロングで優しくて胸はどちらでもいいな。で、優しさはベルダンディーのように女神で、声は能登とか、海原エレナとかがいいな」。なんて」

『つまり、我のような女子をいうのじゃな』

「「は?」「」

すると二人の間に割って入ってきたのは……小さなアルだった。

「アル、お前?!」

『どうだ、この姿は！ウエストに頼んで用意してもらったのだ!』

「用意してもらったって。ただ、人形サイズになっただけじゃない

ですか！」

『なにを?!』

「まあ、否定できないよな」

知っている者ならわかるだろう。マジウススタイルになるとアルは
ちびアルになるのだ!

『これなら本より楽だろう?』

「いや、楽だけどさ。色々と、な?なに、俺の携帯ストラップに
もなるか?」

『普通に頭の上とか肩でよからう?』

「ん、それでいつか。ていうわけで、瑠璃。俺学園に戻るわ」

「ちょ、泊まらないんですか?」

「門限の五月蠅い、ブラコン教師がいるんだよ」

「・・・もお! ああ、それと。近々、ハワイに行くかもしれないの
で用意しておいてくださいね」

「ハワイ?! 水・着・美・女!」

『とつとといかんか!』

ちびアルの猫パンチが蛮にヒットする！

「ぶべら！お前、やっぱ本に戻れよ?!」

『ふん。これで、お前もいよいよにできまい!』

結局蛮は、静かに過ごせぬまま学園に戻るのであった。

「ところで、お前飛べるのか?」

『ほれ』

ひょい、蛮の周りを軽く飛んでから蛮の頭に着陸する。

「便利だな。色々」

『えっへん!』

「（威張るところじゃねえよな?）」

『（ふふ。とりあえずはこれで我慢。もう少したてば……ふっふ
ふふ!）』

戻って地下研究所

「博士ー、言われた通りの材料買ってきたロボよー」

「おお、エルザ。準備は整ったのだ！これで、吾輩は誰にもできなかった真理へと近くづくであ~~~~る!!!」

彼にギターをかき鳴らすウエスト。しかし、エルザにとっては迷惑でしかない。

「そのまま、右腕と左足持っていければいいロボ」

「コトはい……」

その後、博士は光に包まれたロボ。そして、『やはり、吾輩は天才！』とか言いだして両手をパン！とやったら壁が出たりしたロボ。

「とととと博士も黄色い救急車にお世話になるロボね・・・」

第十話 めっはっはは！タイトルジャックなのである！！でも、させねーロボ
魔導書アルはちびアルに進化した！

というわけで、ウエスト・エルザの登場回。それと、アルの進化で
した。

次はとうとうあの身体に……。

この世界では、本に意志宿っただけで肉体はないという設定です。

そして、ウエストは真理の扉を……。

正直、束とウエストが戦ったらウエストが勝つと思う。なぜなら、
束にはなにものがあるから。

それは……ギャグ補正……

不死身の肉体と一晩で破壊ロボをつくれるしな！

しかし、ISと破壊ロボ。どちらが強いのか……。まあ、破壊ロボ
だな。だって、ドリルがあるからな！

で、次回から二巻に突入なのですが。序盤からとあるキャラが崩壊
します。別に言い換えるならキャラ崩壊。

だって、好きなんだもん。

チンク姉

第十一話　なんか、昔の自分のこと知っている奴がいるとちょっと気まずいよな

今回、ラウラが最初から崩壊しています。

ていうか、これ書いててなんだかみんな変になってる気がする。

第十一話　なんか、昔の自分のこと知っている奴がいるとちょっと気まずいよな

『「うら、蛮起きぬか。もう朝だぞ!」』

ぺしぺしと猫パンチで寝ている蛮の頬を叩くアル。
それを数分繰り返すとやっと蛮は起き上がった。

「うえ……」

気持ち悪い……。

「うう……飲み過ぎた」

ベッドの目の前にある机を見ると缶ビールがあちこちに転がっている。

「アルう……薬と水……う」

『仕方がないな……』

アルはそのまま台所にいき、コップに水を注ぎ机に置いた。両手で運ぶため、薬は水を置いた後薬があるところまでいき薬を持ってきた。

『ほら、薬だ。ゆっくり飲むんだぞ』

「ああ……くくく……」

どうみてもアルが手間のかかる息子を世話する母にしかみえない。ちびだが。

「アルう……制服は……？」

『下は履いたままだから、上着だけ着ろ。ほら、腕をあげんか』

ちびアルのため片方ずつ袖をあげ着させる。

「ああ〜」

『よし、ボタンは……いいか。ほら、いくぞ。鞆はいいだろう。どうせ、寝るのだからな』

「ちくしょう……痛え……」

『もう、遅刻は確定だからゆっくりゆくか。寝癖は我がなんとかす

るから』

「すまん・・・うえ・・・」

そのままふらふらな足取りで蛮は教室に向かった。

アルは蛮の頭に乗し、アル専用のブラシとスプレーを使い教室までできるだけ寝癖を直していた。

その頃、教室は新たな出来事があるとは知らずに。

1年1組

「さて、出席を取るぞ。・・・ん、大神殿はいないか」

蛮が部屋を出たころ、丁度HRが始まり出席を取っていた。

「他はいるな・・・？よし、今日は転校生を紹介する！」

「「「えええつ?!」「」」

クラスはざわめいた。

「よし、入れ」

「失礼します」

そして、入ってきたのは一人の眼帯をした少女と・・・少年だった。

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。日本は初めてなので、不慣れなこともあります。よろしくお願いします」

どごそのイケメンよりまともな挨拶をした転校生。

「お、男・・・」

「きゃあああああああ!!!!」

彼女達は喜んだ。男が増えるのはとてもいいことなのだ。その内の一人はどごそのイケメンでそれなりだが、もう一人は完全に周りから避けている。まあ、おっさんだからな。

「男子、男子よー!!」

「ありがとう、そしてありがとうー!!」

「地球はいいところだぞー!!!」

なんか、色々混じっているが気にしない方向で。

「静かにしろ!まだ、終わっていないんだ。次、ラウラ。自己紹介をしろ」

「は、教官」

「ここでは、そう呼ぶな。私は今、教師だ」

「失礼しました、織斑先生」

まるで、軍人。ていうか、軍人だよね?
眼帯をしている少女は挨拶をする。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それだけ。たった、それだけだった。

「あの、以上ですか？」

「はい」

ズバツと切り捨てた。真耶ちゃんはその場にかくとうなだれる。教師の意味ねえ！
すると、ラウラは一夏の傍に近寄り。

「貴様が！」

「え？」

ラウラが手を掲げたその時！

ガラッ！

「大神い・・・蛮・・・ただいま・・・とうちやくう・・・つえ」

入ってきたのは未だに寄った蛮だった。アルはそのまま頭の上でまるで人形のように固まっている。

「（え、なにアレ？）」

「（人形？）」

「（似合わないー！）」

周りの女子は陰口を言っていた。

しかし、それに気付かないアルではなく……。

「（ギロ！）」

「「「ヒツ！」「」「」

さりげない殺意を放っていた。

……大人気ない。

「……大神？」

しかし、ただ一人彼の名前に反応していた者がいた。ラウラだ。
ラウラは気になり彼の下に歩いていった。

「失礼」

「……あ？」

「間違っていた申し訳ありませんが、あなたの名前は大神蛮殿では
ありませんか？」

「あ．．ああ？そつだぞ．．正真正銘『魔を断つ蛮』こと大神蛮だ．
．．．」

「やはり！お会いできて光栄です！」

「．．．え？？？！！！！！！」

ラウラはいきなり目を輝かせ、彼の手を握った。酔った彼には逆ら
う力もない。

「噂はドイツでもあなたのあの話は伝説です！」

「．．．．伝説？？！！！！！！」

「【世界一の吸引力蛮】と！」

「．．．．．へ？！！！！！！」

それを聞くと、周りは？を浮かべ。蛮は頭を抱える。

「あーそれ、俺がふざけてつけたんだよ．．．痛え．．．。確か．．．
【飛行機馬鹿蛮】？違うな。【ライトニングバロン蛮】だっけ？あ
あ、もうなんでもいいや．．．」

「おお！やはり、大神殿は噂の通りです！」

「俺は・・・そんなたいした人間じゃねえ・・・。ていうか、お前誰？」

「は、ドイツ軍所属ラウラ・ボーデヴィツヒであります！階級は少佐です」

「ああそう。えーと、チンク姉？」

眼帯で銀髪って言ったら・・・それしかないだろうが。

「ちんく？私は、ラウラです」

「ああ？チンク姉だろ・・・。もう、無理！！」

蛮は口を押さへ、走り出した。

「大神殿、どこへいくのですか！？」

しかし、何故かラウラも付いていった。

「あの、HR・・・」

結局、HRは二人を除いて進められた。

学園 屋上

トイレで散々吐いた蛮はさっそく授業をサボっていた。
しかも、転校初日のチンク姉まで。

「ふー、やっと酔いが抜けた感じだ」

「その、大神殿」

「ん？なんだ、チンク姉」

「いや、その・・・いいです」

「で、何か話があつて俺と一緒にサボってんだろ？」

「はい。実は、なんで大神殿は軍を抜けたのかと。貴方は数々の伝説を残して、軍を去った。それが、気がかりなんです」

正直、ここにきての俺の過去知っている人物に会うとは思わなかった。。。

そう、何を隠そう。俺はかつて軍のテストパイロットをしていたのである！！

「ちなみに、聞くけど。どこまで俺のこと知ってる？」

「はい。新型機でかのラプター5機と、F-15・30機の編隊をシミュレーターとはいえ、全部撃墜したとか」

「ふむふむ」

「敵国に潜入していた兵士を単独で救出に成功したとか」

「ほー」

「あと勲章を三度受賞されて、三度はく奪されたとか」

「まあ、だいたい合ってる」

「そうなのですか！？」

なんで、チンク姉はこんなに喜んでるんだ？
俺には理解できん。

「それと、もう一つおまけで聞いていいか？」

「はい、なんなりと！」

「戦闘機乗り達にとって俺ってどう思われているわけ？」

「それはもう憧れの的ですよ！最年少でテストパイロットになり、数々の伝説を残したんですから！」

「いやー、それほどでも」

壺は褒められると素直に受けいれる男なのだ！

「チンク姉」

「はい？」

「お前、いいヤツだな！」

「は、はあ？」

「美少女じゃないが、お前はいい女だ！」

本来ならどうでもいいが、ここまでいい子はそこから辺にはいないな！ここにいる餓鬼どもも見習ってほしいものだ。

「そんなお前にはなでなでしてやるっ」

なでなで

「お、大神殿！・・・（あ、なんだか気持ちいい）」

その後、ラウラは授業に戻っていたが壘はサボっていた。

『我、最初しか出番ない・・・』

第十一話　なんか、昔の自分のこと知っている奴がいるとちょっと気まずいよな

はい、わかる方にはわかると思いますがマクロスネタです。

いやー、蛮の経歴言っていないですけどかなり自分の趣味入れてます。
一応蛮は軍歴もあることにしています。

そこで、テストパイロットをしました。しかし、話にあったように勲章を三度受賞し、三度はく奪www

どこぞのただ変わらない吸引力と似た感じですよ。

で、ラウラの扱いはヒロインかどうかはおいておいて、主人公陣営側の立ち位置です。理由は、俺が好きだから。

どうだ、まいったか。

ちゃんと、蛮も言っていただろう。美少女じゃないけどいい奴と。つまり、そういうことなのだ。

最後に、キャラが変なのは許してね！

第十二話 貴様が男？女の匂いがプンプンするぞ

転校生が来たその日の午後。蛮は、酔いが覚めそのまま午前中は寝てしまったため午後は中々寝付けなかつたので教室に来ていた。

と言っても、机の上でちびアルを置いて眺めているだけだが。

「（しかし・・・）」

俺は学園ライフを送っていると言うのになぜこつても美少女が一人もいないのか。

蛮は、何故か冷静に現在状況を確認していた。

こつ、学園のマドンナと呼ばれる存在が一人ぐらいはいてもいいと思う。そつ、まさにみんなの憧れ生徒会長とか！？

『ねえ』

アルは的確にツツコンでいた。

しかし、彼は知らない。この学園の生徒会長が、彼が苦手する分類

に入る女だということ……。

「やめておいた方がいいと思うけど？」

「なんで？一応あいさつはしておいた方がいいと思うよっ。」

なぜか、周りが騒がしい。

敵機接近！

俺のレーダーが反応していた。

「あの……。」

声の先には……見知らぬ男の娘がいた。……男の娘？

「(……デジャヴ?)」

「フランスから来た、シャルル・デュノアです。HRの時挨拶がで
きなかったので」

「……。」

しかし、蛭は何も言わない。ただ、シャルルを視ている。

それを見て周りも・・・。

「（また、何か言うのよ）」

「（そうよ、そうよ）」

「（やっぱり、おじさんよね）」

などなど。

「（スカウターON!!!）」

伊達メガネと言う名のスカウターを装着。

「・・・?」

しかし、反応しない。おかしいな・・・。
俺は、スカウターを外し立ち上がり・・・

「くんくん・・・」

「あ、あの・・・」

俺は、目の前にいる“彼女”の匂いを嗅いだ。
そして、俺は不敵な笑みを浮かべたに違いない。

「なるほどね、なるほどなるほど。・・・デュノア社なんて会社フランスに・・・ああ、だからか」

蛮は自分の世界に入りこみ自己分析を始めていた。
そして、蛮は大きな爆弾を落とす。

「まあ、精々バレないよう頑張れよ。棒読みちゃん」

「!?!」

そう言って蛮は立ち去った。

棒読みちゃんは、一瞬驚いた表情をするがすぐに平静に戻った。

「だから言っただろ？挨拶なんて無駄だつて」

あ、イケメンいたのね。

「う、うん・・・。（もしかして、バレた?!）」

「（人が困っているのって面白！）」

『メシウマという奴じゃな』

放課後

蛮は、アルが新しい武装のテストをしたいと言いだしたのでアリーナに向かっていた。
当初、蛮は。

「俺、シュミュレータとか訓練って苦手なんだよな。そう、緊張感がなくて」

『ただ単に、行きたくないと言え』

なぜ、こんなことをすると言えば。先日、霸道邸に帰った時テストはできなかったのだ。

大半がアルが原因ではあるが。

「だってよお、他にもいるんだろっ？っそう考えるとあまり手の内を

出すのは得策ではないだろうが」

『それもそうだが……。感覚ぐらいつかめた方がいいだろう？』

確かに、アルのいう事も一理あるな。

「わかったよ、今回はお前に従うよ」

『うぬ、それでいいのだ！』

頭の上で胸を張るちびアル。その姿はどこか可愛い。

「じゃあ、いく」

「あらら」

アリーナに向かおうとして角を曲がったら誰かとぶつかってしまった。
た。

俺は、なんでもないがぶつかってしまった彼女は尻もちをついてしまったようだ。

「ああ、すまん。大丈夫……。か」

手を差し伸べようとしたその時だった。
俺の思考は停止していた。

「ありがとうございます」

「……」

「それでは」

ぶつかった彼女は去っていったが蜜の時は止まったままだ。

『おい、どうしたのだ？』

……あの美しい黒髪。透き通るようなボイス。女性としての魅力。
何よりあの大きな胸バストと尻ヒップ！そして、彼女は美・少・女！！

「アル……」

『なんだ？』

「俺は運命の人と出会ったよ」

『……どうした？頭が逝かれたのか？ポンポンいたいのか？』

「ああ、これが恋……」

一方 蛮の運命の人は

「ん？そういえば、あの方が噂の……うふふ」

「！なんだ、寒気が」

蛮はまたもや知らなかった。

この出会いが自身の貞操の危機だと言うことを……

その後、アリーナにいったら大佐殿もどき改め金髪お嬢とツインテールがチンク姉と戦っていた。それをみた俺はトトカルチョをしようとしたがあっけなく二人が負けたので賭けにならなかったのだ。

だが、そこにあのイケメンが現れて……

「チンク姉、やっちまえ！イケメン死すべし！」

チンク姉がイケメンをフルボッコしようとしていたので蛮は応援していた。

一人で。

しかし、それを真に受ける子もいるわけで・

「大神殿！・・・織斑一夏、貴様はここで倒す！」

「そうだ、そうだ！イケメン抹殺、撲滅、死滅！！！」

それに続いてどんどん煽る蛮。アリーナにいるイケメンと棒読みは何か言っているが外にいる蛮には聞こえないのだ。

「何をやっているか、貴様ら！！！」

しかし、ここで邪魔魔虫が登場。

「ち、ブラコン教師め！私情を挟むとかねえよ！」

これは、もう私情という話ではないと思うが。

しかし、彼女のおかげでこの場を治めることができた。その日放課後に後日行われる予定のトーナメント戦がタッグ・トーナメント戦に変更になり。

「チンク姉、俺と組んでイケメンを倒すぞ！」

「はい、大神殿！」

チンク姉は完全に洗脳されていた。

第十二話 貴様が男？女の匂いがプンプンするぞ（後書き）

いろんな意味で伏線がちらほらと。

シャルの棒読みという愛称は中の人ネタ。

本当、成長したよね。あの時から比べれば。ぶっちゃけ、彼女の初めて出た作品知っている人少ないと思う。

俺は大好きだけどな！

さて、地味にファサリナさんを出しました。

ぶっちゃけ、それ以外今回の話の見どころなんてないよね！。

で、あと二話で二巻の内容が終わります。

個人的には蛮の過去とファサリナさんの話。それと、幼馴染の話を書いていくつもりです。

ていうか、幼馴染の話書かないとこの作品での彼女の存在意味がわからないままになってしまう。

では、今回はこの辺で

第十三話 チンク姉には変身能力が・・・

これまでの二巻でのあらすじ！

転校生がくる。一人は、俺のことを知っていた。で、仲良くなった。チンク姉はいい子ってこと。

もう一人は、男らしいけど女だった（まだ、脅しただけ）。

イケメンをフルボッコできると思ったらブラコン教師が邪魔をして倒せなかったが、タッグトーナメントが行われると言う事でチンク姉と組むことに。

結果。チンク姉は完全に蛮に洗脳された。

タッグトーナメント当日

来賓VIP観客席

「で、なんで来たんだ？」

「あら。霸道財閥は学園に多額の寄付をしているのですから招待状が来ても問題ありませんよ、壘」

トーナメント当日。なぜか、瑠璃とウインフィールドがきていたの
で俺は瑠璃に問い詰めいていた。

「はあ」

「もう、折角応援に来てあげましたのに」

「別に頼んでねえだろうが・・・」

「・・・」

デリカシーのない壘の一言で瑠璃の表情は暗くなる。ウインフィールドもその眼鏡を光らせていた。
それは、確かに壘にも伝わり・・・。

「ま、恥をかかないように頑張るさ。どっかの誰かさんが見てる」と
とだしな

ぼん

と瑠璃の頭に手を置いて撫でた。

「素直じゃないんですから」

「ふん」

蛮はそのまま部屋を出ていく。彼女達に背を向け、手を振りながら。

ラウラ side

ついにこの日が来た。

織斑一夏を倒す日が。あいつさえ、いなければ教官がこんなところにいる必要もない。あの人はこんなところにいるべき人間ではないのだ。

そして、何より負ける気がしない。なぜなら、タッグを組む人があの人。大神蛮なのだから。あの方は偉大だ。落ちこぼれと言われていたあの時から、私の心の支えは彼だった。私と同じころにテストパイロットになり数々の伝説を残した。だから、私も彼のようにになりたい。その私がいまここにいる。

しかし、気に入らないのが他の者達が大神殿に送る視線だ。見下しているようなあの目。気に入らない。彼の偉大さがわかっていないのだ。

「さて、いくか」

準備を整えた私はアリーナへ向かう。対戦相手は、私と大神殿VS織斑一夏とシャルル・デュノアだった。まさに、天が私達に祝福をしているよしか思えない。

それと、今更なのだがなぜ大神殿は織斑一夏を嫌うのだろうか？いや、別にいいのだが……。あの方にも嫌いな人種と言う者があるのだろうか？

(イケメンが大っ嫌いです)

「まあ、負けるはずはない」

「それは、凄い自信だな」

「誰だ?!」

更衣室には私かいないはずなのに男の声。しかも、気配をまったく感じなかった。

そして、私の目の前には謎の男が立っていた。

「貴様の心の奥。いい色だ。嫉妬、怒り。今のお前を支えている本質」

「誰だ、貴様は!」

「何、すぐに忘れるぞ。お前のような闇を持った者には魔は喜んで喰ってくれるだろう」

「なにを……!」

そして、私が最後にみたのが黒い気持ち悪い物体が私を包む姿だった。

「さあ、見せてもらおうか。大神蛮……」

男は不気味な笑みを浮かべながら影へと消えていった。

End

そして、まもなく試合が開始される。観客席ではかなり盛り上がっている。それもそのはず。対戦の組み合わせが噂の男子と転校生同士のペア。しかし、大半の応援が織斑一夏とシャルル・デュノアであるのは仕方がないことである。

当の本人たちは互いに睨み合っている。

「くく、公衆の面前でイケメンを葬れる絶好の機会だ！」

「……」

大人の発言とは思えないこという童貞となぜか無言のチンク姉。

「一夏、頑張ろうね」

「ああ。絶対、あのおっさんには負けたくない！」

「うん……（色々あってわからなかったけどでも今更聞くのも……）

」

対して男子ペアは互いに張り切っている。

シャルルが思い悩んでいるのはもう言わなくてもわかると思っが彼女が女だ。それが、イケメンにばれ……ていうか死ね！

……失礼。まあ、そんな仲になったわけなのだが。蛮は前々から気付いていたので今更という感じなのである。

『両者位置についてください』

緊張が走る。

『試合、開始!』

両者とも動く。すでにシャルル・デュノアの両手にはアサルトライフルが握られている。彼女は高速切替ラピッド・スイッチを得意とするためこのくらいは朝飯前と言ったところ。
だが

DON! DON!

上には上がいる。

「え?!」

「おいおい、どうしたんだ? 鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔をして?」

彼女が銃を持った瞬間爆発したのだ。しかし、シャルルが銃を出す以前よりも早く蛮は両手に自動拳銃と回転式拳銃以降クトゥグアとイタクアを構えシャルルが持っていたアサルトライフルの銃口に銃弾を叩き込んだのだ。

「こんなのび太君だってできるぜ」

「(のび太君って誰?!)」

「マジかよ」

シャルルは素直にツツコンでいた。
イケメンは驚いていた。

「チンク姉、棒読みちゃんは俺がやる。お前にイケメンを任せるぜ」

「・・・」

「ああ？」

しかし、チンク姉は無言。そして、動いた。

その行動に疑問が残るが蛮はあえて気にしなかった。

「さあ、相手をしてやるよ。棒読みちゃん！」

「くっ！」

失ったライフルの代わりにサブマシンガンをだし距離を取りながら戦う。

蛮は走りながら巧みによけ、反撃する。

「あなたは・・・」

「ああ？」

「あなたは最初から知っていたんですか?!」

「何を？」

シャルルはいきなりプライベート・チャンネルを開き蛮とコンタクトを取っていた。

「僕のことを」

「ああ、お前が女だってことだろう？」

「!?!」

「これは大人からのアドバイスだ。諜報活動をするならもっと勉強してくるんだっとな」

「え？」

「貴様は男にしては体つきが妙だったし、何より顔立ち、声も男には思えん。そして、なによりお前からは男の臭いがしない。それに、俺のレーダーも反応しなかったしな」

「臭いって・・・」

いまどき男の娘なんて需要なんてないんだよ!!

「それと、俺からも一ついいか？」

「なんですか？」

今度は蛭が質問した。

「お前、あのイケメンに惚れただろう？」

「え！・・・そ、そんなこと」

「チツ。だから、イケメンは嫌いなんだよ！これだから、餓鬼は！ちよつと優しくされただけでホイホイされやがって。イケメンホイホイってか？！ああん？！」

「なんか逆切れされた！」

「もう嫌だ、終わらせる。アル！」

『（やっと出番！）応！アトラック・ナチャ！』

するとデモンベインの頭部からシャルルのラファールに向かって赤い糸が絡まり拘束された。

「え、なにこれ！動けない！」

「今日は出血大サービスだ！全弾持って逝きやがれ！」

それからもう酷いものだった。全弾とか言いながらリロードしまくり銃弾の雨を身動きがとれないシャルルに全弾撃った。辺りには薬莢が転がっており、ハンドガンでよくこれだけ撃ったと思うぐらいの数だった。

『ラファール、シールドエネルギー0』

結果、シャルはあっけなく負けた。

一方、それを見ていた瑠璃とウインフィールドはというと。

「本当に大人気ないですわ」

「ええ」

「にしても、蛮は単純ですわね」

「しかし、それが蛮様の原動力？みたいなものですから」

「否定できないのが凄いですわ」

「ええ、まったく」

こっちもこっちで酷かった。

「さて、チンク姉の方はっ」と

・ 蛮はチンク姉に加勢しようとする状況を確認した。しかし、そこでは・

「アアアアアアアアアア!!!!」

なんか、叫んで黒くなったチンク姉がいた。

「まさか、変身能力を持っていたのか」

イケ・・・なんとかside

一体どうなっているんだ。開始直前にシャルルの銃が爆発するし、気付いたら俺とラウラが戦うことになった。それは、それで構わないんだがまったく隙がない。

俺はまったく反撃できず防御に回るしかなかった。手筈では、シャルルからライフルを借りて戦う手段もあったがシャルルはまったく手が空かない状況だった。

そして、気付けばシャルルは負けていた。

これってヤバイ？

そう思った直前、ラウラがいきなり叫びだして・・

(これ以上テメエの回想はさせねえから！)

は?!

End

????side

憎い。目の前にいる男が憎い。

そう、こいつさえいなければ教官は。あの人はこんな所に来なくて済んだ。

こいつがいなければ、教官はもう一度あの栄光を掴むことができた。

そっだ、こいつさえ、こいつがいなければ!!

もっと、解放しろ。お前の思いを、すべて……!!

『アアアアアアアア!!!!』

ケス、タオス、クロス……

End

「なんだ、ありゃ？」

チンク姉が第二の姿に変身した。しかし、原型など留めておらず妙な黒い騎士のような形をしている。

『蛮、様子がおかしい』

「ああ、変だ。変身能力にしてはちょっとおかしい」

『このうつけめ。それではないわ』

「わかってる。臭うな、魔の臭いだ……まさか!」

俺は目に意識を集中させる。

見るのではなく、視るのだ。そうすれば、自ずと視えてくる……。

「ち、厄介だな」

視えたのはチンク姉が体を寄せている姿。しかし、彼女を覆うように降魔がいる。

あれは、実態を持たない。あれの元凶は人の心の闇。そこを突かれたのだ。人は皆、善人ではない。何かしら、闇の部分が存在する。

それは、妬みや嫉妬。ほんの些細なことから生まれる。そこに、何者かによって生み出された降魔。

「しかし、一体誰が……」

重要なのはそこだ。一体誰がどうやって行ったのか。敵なのは間違いないが、犯人像が思い浮かばない。

ただ単に、降魔が蘇えっただけではないのか？

「とにかく、まずはチンク姉を『テメエー！』は？」

行動を起こす前にあのイケメンが突撃していた。

なぜかはわからないが怒っているらしい。

すると、それに気付いたのかチンク姉。黒騎士の身体から触手が伸びた。それをかわしたイケメンはその触手を斬った。血なのかオイルなのかよくわからない液体が飛び出る。だが、異変が起きた。

『アアアアアア！！』

突然、チンク姉は叫びだした。まるで、痛みをこらえるように。

「まさか！」

壱は気付いた。それは、アレとチンク姉が直接繋がっているということだ。

ダメージを受ければそのままチンク姉にダイレクトに伝わる。しかも、触手を斬られただけであの痛み。これは、非常に不味い。

「おい、イケメン！攻撃を止める！」

「うるさい！アレは、千冬姉だけのものなんだ！あいつが、使っているものじゃないんだよ！」

「何言ってるんだ？」

『どつちら、あの姿に姉の姿を重ねているらしいぞ』

「正直に言うが、怒る道理がわからん」

真似ているからなんだってんだ。世の中、パクリで生活しているよ
うなもんだぞ。特に、チャイナとか中国とか……。

「許さねえ！絶対に許さねえ！！」

とうとうイケメンは雪片の零落白夜を発動。その剣は確かに黒騎士
の腕を斬った。
だが……

『嫌嗚呼アアア嗚呼！！』

失った腕を庇いながらまるで泣き叫んでいた。

「な、なんだよ?!」

「この馬鹿野郎が!」

「ぐは!!」

それに見かねた蛮がイケメンを蹴り飛ばした。

「何するんだよ?!アレをどうにかしなきゃいけないだろうが?!」

「何もわかってない野郎が口出しするな!たかが、同じ形をしているだけで馬鹿みたいに怒りやがって」

「お前に何がわかるんだよ?!あれは、千冬姉だけの物　　!」

すべてを言い終える前に壘はイケメンに銃口を向けていた。

「テメエの都合なんか知るか。黙って、寝てろ」

冷たい宣告を突きつけ、容赦なく引き金を引く。
白式のエネルギーはあつと言つ間に0になった。そして、恒例の「とく壘はイケメンを投げ飛ばした。そのショックでイケメンの意識は途絶えた。」

「一夏?!」

イケメンが落ちたのは丁度シャルルのすぐ傍だった。

「その馬鹿を連れてとつと逃げろ」

「でも」

「こっちは命懸かってんだ、失せる！」

「ヒッ！」

シャルルに向け、容赦のない殺気を浴びせる。殺気をもろに受けた彼女は酷く怯えながら一夏を抱え、その場から退避した。

『にしても、今回もマジだな』

「魔を断つのが俺の使命だ」

『だが、先ほどの台詞からしてかなり肩入れしているではないか？』

「こうなったのは自分の心の弱さが原因だ。自業自得と言えばそれで済む。けどな・・・」

『・・・』

「俺は魔を断つ者。魔に囚われた者を救うのもまた俺の使命」

そう、使命。それがなかったら俺は他人の振りをするだろう。俺は、さっきのイケメンみたく正義を振りかざしてはいない。ないわけではない。ただ、高慢な望みなどしていかないだけだ。

目の前で困っているやつがいたら助けるぐらいはする（美少女か女限定）。

それに……

「あいつはいい子だからな」

『お前らしいよ』

「だろ?……さて、アル。あいつの動きを止めてくれ」

『それはいいが、お前が動かしていない分長くは持たないぞ?』

「構わねえよ。一分もあれば終わる」

『わかった』

蛭はデモンベインを解除し、アルが代わりに操縦する。

「アル、霊剣荒鷹を」

『了解』

蛭の手に刀が現れる。蛭はそれをベルトに差す。

『では、いくぞ……アトラック・ナチャ!』

同時に蛮は抜刀する構えをし、集中する。霊力を高め、イメージする。

「すゝ、はゝ」

一度深呼吸。

『アアアアアア！！！！！』

『ええい、暴れるな！！』

蛮が操縦していない分、精度が落ちる。それでも、アルは必死に耐えていた。

『く、蛮！』

「！！」

そして、今その刀が抜かれた！

「破邪剣征・桜花放神！！」

そのまま刀を振り下ろす。桃色の斬撃が黒騎士を一刀両断。斬撃が通り過ぎたが、切傷はない。……だが。

バリ……バリバリ！

縦にヒビが入り、光が溢れる。

『キアアアアア！！！』

まるで、悪魔の叫び。だが、それは死の叫び。

声が終わると同時に黒騎士は崩壊し、そこから生まれた状態の彼女が落ちてきた。蛮は、自分が羽織っていた上着を着させそのままお姫様抱っこで抱えた。

「いい奴ほど浸け込みやすいんだからな。困ったもんだ」

「……すー」

彼の悩みなど知らず、彼の腕の中で眠るラウラ。その寝顔は本当に可愛いと呼べるものだった。

「アルもお疲れさん」

『お主もな』

そう言うとアルはちびアルモードに戻り、蛮の頭へ。
そして、そのまま蛮はラウラを抱えて保健室へ向かった。

「アレが、大神蛮か」

だが、その光景を遥遠く。空の上から見ている者がいた。
まるで、陰陽師のような服装に扇子を持っていた。さらに、その隣には小さな少女が一人。

「はい。今の所。実力はかなりあると思われませんが、未知数です」

「ふむ……」

顔を隠していて扇子を閉じ、彼は笑みを浮かべた。

「しかし、面白い男よ」

「ですが、マスターには及びません」

「ふ、可愛いやつよ。いくぞ、エセルドレーダ」

「Yes、マスター」

まるで、初めからいなかったように二人は消えた。

保健室へ向かう通路

保健室へ向かっている蛮達。

しかし、まるで通さんばかりに通路に立っているブラコン教師がいた。

「一体何の用だ？」

「それは、こちらの台詞だ」

「なんだ？お前の弟を撃つたことか？それとも、こうなった原因か？」

「両方だ！」

ブラコン教師め……。

「ま、喋る気はないがな」

「ふざけるな！」

「ふざけてないさ。だって、ここはどこの国家にも属さず法律は通じないんだろ？。だったら、問題ないだろうが。まあ、前者についてなら喋ってもいいが……」

「……」

ブラコンの顔をうかがってみるが依然と俺を睨んでくる。

「ハッキリ言っぞ。お前の弟の所為でこいつが殺されそうになった」

大袈裟かもしれないが例え死ななかつたとしても精神は死んでいた
だろう。

「！なぜ、そう言い切れる」

「詳しいことを言うつもりはない。ただ、これだけは言っておく。
世の中、自分がやっていることが正しいとは限らない」

「！（まさか、私のことを・・・？）」

まあ、これはイケメンにも言えるしブラコン教師にも言えることだ。

「では、あなたの行動は正しいのですか？それとも」

「俺か？そうだな、俺は・・・」

俺の行動は正しい？まさか。

「俺がいるからこういつことが起きるのみ」

「・・・は？」

ま、わかるとは思えないけどね。

俺がいるから奴らがいる。奴らがいるから俺がいる。

「つまり、そういつことだ」

そして、俺はそのまま呆けているブルーコンを置き去りにし保健室へと向かった。

第十三話 チンク姉には変身能力が・・・（後書き）

前回あんなことあったけど全然気にしてないよ！

それが、原因で遅くなったわけではないんだ。だって、俺寮生活だから。

さて、今回いろいろと出ましたね。ついにあの方が……。でも、ちよっと違うんだな。

え、イケメンの扱いがむごい？だって、そういう仕様だもの。

冗談抜きで、原作とかアニメのあのシーンで起こる理由が俺にはわからない。

ぶっちゃけ、シスコンすぎで困るぐらいだよ。

そんなことより

今、ソニコミで忙しいんだよ！

戦場ENDなんてもう友達なんだ！だから、だれか衣装の組み合わせとか教えて~~~~~。

GENKIIのほうにしかメーターがいかないんだ。いったいどうい

う衣装をすれば違うのになるんだ・・・。

第十四話

いいか？お嫁さんってのは幸せで、
幸せの絶頂になってやるもんな

第十四話 いいか？お嫁さんってのは幸せで、幸せの絶頂になってやるもんなん

保健室

あの事件のあと、ラウラは蛮によって保健室へ運ばれた。検査の結果、身体には特に異常は見られなかった。しかし、依然に彼女は目覚めない。というか、ぐっすり寝ているので起きる気配がない。試合終了から二時間経ったあと、ようやく彼女は目覚めた。

「……ここは？」

「よ、目が覚めたようだな」

「大神殿？」

彼女を運んだ蛮は、ずっとそばにっていた。

「私は、一体どうしたのですか？」

「簡単に言えば、お前の心の闇を糧に魔がお前を支配していた。と、言えばいいか？」

蛭はからつきし隠すつもりはなかった。

「にしても、お前みたいなやつがあんな闇を抱えているとは思えなかったぜ」

「その・・・」

ラウラは語った。自分は落ちこぼれだった。結局、理想など抱いても証明できなければ意味なかった。

そんな時、自分を救ったのは織斑教官だったと。

彼女のおかげで今の自分があると。だから、あの人を汚した織斑一夏が許せなかった。

それと・・・

「それと？」

「あなたに対する周りの視線が気に入らなかつたから・・・です」

「ぶ、そんなお前さんが気にすることじゃないだろうが」

ま、悪気はしないけどな。と蛭は付け加えた。

「しかし！あなたは、あなたのことを知らない癖にあなたを侮辱す

るよじ目で 「！」

ぼん

蛮はラウラの頭に自分の手を乗せた。

「本当、お前はいい子だな。俺の代わりに怒ってくれるなんて。けど、もうそんなことしないでいいぜ？正直、あんま気にしてないからな」

あ、イケメンは別だけどな！
と、さらにつけ加えた

「それでも・・・」

困ったな・・・。子供の扱いなんてあんましたことがないからな・・・。

全然、割り切れないラウラに悩む蛮。

「ん・・・あ。そういえば、チンク姉。お前の名前なんて言うんだ？」

「へ？」

「だから、名前だよ。名・前！」

ラウラは目を丸にしていた。まあ、当然の反応だろう。

「ラウラ、ラウラ・ボーデヴィツヒです」

「ラウラか。よし、覚えた」

「え？」

「俺、名前覚えるのは苦手なんだよ。知り合い以外」

ちゃんと、名前を教えてもらっても覚えるかどうかあやふやな場合もあるがな。

「だから、そのチンク姉と呼んでいたのですが？」

「概ねその通り」

「（ポカーン）」

ラウラは、ただたんに自分の名前が憶えられていないことにショックを受けていた。

そんな、ラウラを無視し立ち上がり部屋を出ようとする姿。

しかし、出る直前で彼は足を止め振り向いた。

「あ、そうそう。俺に名前を憶えてもらったんだ。誇りに思っていないぜ」

そう言っただけで彼は今度こそ部屋を出て行った。
残ったチンク姉、改めラウラは。

「大神殿に名前を覚えてもらった……。誇ってもいい……。!!」

彼女には、笑顔が溢れていた。

どうも、ナイスガイ蛮です。え、違っつて？細かいこと気にスンナ。昨日一件から一夜明けたわけなんだが、さらに周りの視線が痛くなつた。

俺、どんどん敵作っっていくな。

ま、気にしてないけど。

で、今日は珍しく朝からHRに出席している。ただ単に、酔っほど飲まなかっただけであるが。

「えーと、今日はその転校生を紹介というか。皆さん知っているのですが」

おや、真耶ちゃんの様子がおかしいぞ？

「改めまして、シャルロット・デュノアです」

なんか、男装から女装に戻った棒読みがいた。なぜか、正体をバラしている。どうでもいいが。それを聞いて、周りの女子は騒いでいる。

そしたら、一緒に大浴場に入ったとかないとか。

うん。。。

その爆弾発言に周りも耳を疑っていた。

「というわけで、一緒に市役所に」

「ふざけるな！俺は童貞だ！」

「私だって……」

「言つな、恥さらし！」

いや、お前がまだアレだったのはわかってるよ?!だって、男に
いるように思えないし。
そもそも、顔を赤くしながら言つな!

「いいか?お嫁さんってのは幸せで、幸せの絶頂になってやるもん
なんだ。だから」

「私は今とても幸せです！」

「俺は、幸せじゃない！」

「では、一緒に幸せになりましょうー！」

「断じて拒否するー！」

「って、蛮殿どこへいくのですかー!?!?!」

拝啓

天国にいる父上、母上。俺、お嫁さんができました。

「って、そんなエピソード認めるか!!」

『認めたらこの小説終わりだしな』

メタ発言駄目絶対!

第十四話 いいか？お嫁さんってのは幸せで、幸せの絶頂になってやるもんな

ぶっっちゃけ最後のこれがやりたかったただけなんだよね！！

というわけで、次回ファサリナさんが出るよ！！

蛮、貞操の危機・・・！！

第十五話 俺の心はガラスでできている

「ふふ」

「・・・ッ」

アリーナで戦っている者がいた。一人は我らが【魔を断つ蛮】ことデモンベイン。そして、もう一人。まるで花のような形をしたISを纏い、その豊かな身体を持つ女性。彼女はここの教師だ

「ほら、私はここですよ」

「この・・・痴女が!!」

「もう、何度言ったらわかってくれるのですか？私は」

「言っな、白々しい!!」

なぜ、こうなってしまったのか。それは、今日の授業まで遡らなければならぬ。

IS学園はいくら、ISの専門学校と行っても一般教科もちゃんと教えている。いつも、IS来てバンバン撃ちあっているだけではないのである。

「ぐ〜」

『す〜』

その中で堂々と寝ている男と人形。

「では、この問題を・・・織斑君。答えてください」

しかし、教師とは偉大なのか。そんな彼を気にせず授業を進めていた。

「えーと、わかりません」

「そんなに難しい問題ではありませんよ？それとも、何かに意識しすぎて集中できないんですか？」

「そ、それは・・・！」

そう言いながら胸を強調する教師。元々女子しかいないため、男のことを気にしない服装をしていた。胸元は開けているし、片足がスラット見えている。チャイナ服にも見えなく服装をしているのがフアサリナと呼ばれる教師だった。

「まあ、お年頃ですからね。意識するのも仕方ありません」

「う・・・」

遊ばれていることに気付かないイケメン。彼を気に掛ける女子どもはその目を煌めかせる。嫉妬と殺意の両方を向けて。それに、気付かないフアサリナではなく。

「けど、安心してください。私、あなたには興味ありませんから」

「へ？」

笑顔でハッキリと言われた。

「それでは・・・大神さーん、これに答えてください」

なぜ、あの人？

と誰もが思った。それに、寝てるし。

「ぐ〜」

「大神さん、朝ですよ」

そう言いながらだんだん彼の席に近づいていくファサリナ。しかし、一向に起きる気配がない。そして、彼の耳元にそっと。

「起きないと・・・食べちゃいますよ？」

「!?!」

突如席を立ちあがる壘。

しかし、その顔はどこか恐れているような表情をしていた

「お、お前・・・!」

「あら、どうしたんですか？」

「・・・したな」

「はい？」

「騙したな！俺の純情な心を弄びやがって！」

周りからしてみれば何を言っているんだ、の一言。しかし、蛮とつてさっきの一言ですべてが崩壊していたのだ。

「なんのことですか？」

「この痴女め！」

「違いますよ、私は処・・・」

「言うな！」

裾をまくりながら言ってくる彼女に対して蛮はどなった。いや、正しい選択だった。

「くそ！美少女だと思ってたのに————！！」

そして、蛮は逃げた。

ていうか、現実逃避し始めた。

取り残されたファサリナは・・・

「ふふ、やっぱり可愛い人」

笑っていた。
いい笑顔で。

チエリー side

さて、いきなりのことだったので何がなんだかわからないようだから説明しておく。
なぜ、俺が彼女だとわかりかかって俺が恋に堕ちた運命の人だとわかったのか。それは、描写不足だが俺は美少女の顔は一度見れば絶対に忘れない男だからだ。

眠っていた俺を起こしたあの一言。俺は、あの言葉が大っ嫌いだ。
特に、女。痴女とかギャルとかに言われたらぶち殺したくなるほど殺人衝動が起こる。
あ、A は別だぜ？

いつもお世話になってます（お辞儀）

俺のナニのことは置いといて。
さっき言ったように起きてすぐ彼女がああ美少女だとわかった。
だが、すぐにぶち壊されてしまったのだ。食べちゃうぞ、発言の所為で。

ああ、あの綺麗な美少女が。男を誘惑するあのバスト&ヒップ！すべては俺を騙すための罠！
つまり

童貞狩りかよ！チクシヨウメー！！！！

だから、言ってやったのさ。

この痴女めって！

しかし、何をどうしたらあの返答が返ってくるのか。

処女とか言いだすんもんだ。童貞はいいけど、そっちは言わせない。ていうか、やりとりが前回と似てるぞ！？

そして、俺は逃げた。現実逃避をするために。

学園にあるとある木の下で

「ちくじょー、俺を騙しやがって！！ああ、この世に神なんていないんだー！！！」

木にヤツ当たりしていた。

「あ、俺神じゃなくて幼女神しか信じないんだった」

男の神なんぞ要らん。小さい、羽の生えた俺のゴッド・・・あ、これ天使か。ていうか、美少女だったら誰でもいい・・・。

蛮は脳内からあの痴女を消し去ろうと必死に妄想でカバーしていた。

「何しか信じないんですか？」

だが、しかし！悪夢は去っていなかった・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・（ニコ）」

そこには、痴女が居た。

「いやー！ー！ー！ー！！！」

「ああ、どこにいくんですか？」

蛮は再び逃走。それを追いかけるファサリナ。
それからと言うもの・・・

男子トイレ

「ここまでくれば・・・」

コンコン

「入ってまーす」

つて、ちょっと待て。男子は俺とイケメンだけだぞ？

「ふふ、見つけましたあ」

「ぎゃあああああ！・・・おまわりさん！・・・」

ドンッと扉を開けた瞬間に脱出。

「もう、照れ屋なんですから」

自分の取った行動に恥じらいなどなかった。

ダンボールで移動中

ふ、この最強のスニーカーキングアイテム『ダンボール』があれば今度こそ・・・コン。

あれ、壁にでもぶつかつたか？

そう思って外に出てみると。

「（は！！）」

綺麗な脚線美！その上空に巨大な双丘！！あなたはもしや、俺を救うために現れた美・・・

「はい、あなたのファサリナです」

「・・・」

美女を被った痴女だった。

「スニーカーの嘘つきーーーー！！！！」

「ふふ」

その後、昼過ぎまで隠れては見つかるの繰り返しだった。

屋上

「はあはあ、やっと撒いた」

最終的に逃げ延びた場所は、蛭の定番スポットになっていると言っても過言ではない屋上だった。

「たく、なんなんだよあの女！」

『おゝ、やっと見つけたぞ。蛭』

すると空からふよふよとアルが飛んできた。

「アルか」

『その様子だと大分大変だったようだな』

「・・・ああ」

『まあ、そんな顔をするな。実はな、気になってあの女のことを調べてみたんだがな』

そう言って、蛮のポケットに入っている携帯をとり慣れた手つきが操作する。

『ほれ、吾奴のブログ？よくわからんが日記だ』

「日記がどうしたんだよ……」

わからないまま携帯の画面をみる。そこには……

月×日

いつものように歩いていたら誰かとぶつかった。そして、私は運命の人に出会いました。

月×日

初めての合コンで運命の人と再会。名前と互いにアドレスを交換した。大神さん、可愛い

月×日

出会ってすぐに私達は付き合い始めた。そして、初めて手を繋いだ。

月×日

大神さんとデート。そして、ホテルに……これ以上は書けない！

「で、ででででで電波系?!」

『しかも、この続きを読むに 月×日彼女の両親にご挨拶しに言ったとあるぞ?』

「行ってねえよ!!というか、合ってるの最初だけだし」

『互いに同じことを思っていたとは。相思相愛じゃな(綺麗すぎる笑顔)』

「やめて!俺のライフは0よ!」

『くくくく!』

アルは困っている壱を見て面白がっているのだ。

しかし、今の壱にはアルに逆らえるほどの気力はない・・・。

『からかうのはこれくらいにして。これから、どうするのだ?』

「逃げる。地の果てへ・・・」

「どこへ、逃げるんですか?」

「またかよ!」

ファサリナ、リターン。

「お、俺を狩ろうたってそうはいかねえぞ！」

「狩る？なんのことですか？」

「惚けるんじゃないやねえ！お、俺の初めては……」

「ですから、私は『嘘だ！』もう、信じてもらえませんか？」

それを聞かれ、ファサリナは裾をまくるが同じ展開など蛭はさせまいと叫ぶ。

「信じられるか！」

「ではどうしたら……あ」

ぼん

何か閃いたようで物凄くくしい笑顔だ。

「それでしたらこうしましょう。私と模擬戦をして、あなたが勝ったら私はもうあなたを追いかけません」

「お前が勝ったら？」

「私と」

「私と？」

「私と永遠の愛を誓ってもらいます」

現在

「ということがあったのだ」

『誰に言っているのだ？』

そもそも、永遠の愛「結婚？」「夫婦？
え、なに。これで、大神蛮の物語の終了？
ハッピーエンド？

「認められねるわけねえだろが！？」

「あらあら、そんなに私と一緒にするのが嬉しいのですか？」

「違う!」

『そつだ、そつだ！お前にこやつが飼いならせるとは思えないがな
』！』

「デメエも喧嘩売ってんのか?!」

「余所見している暇はありませんよ?!」

「ッ!」

デモンベインはファサリナの専用機である【ダリア】の棍棒を避ける。しかし、避ければ次には両肩にある花のような形をしたものからビーム砲が飛んでくる。

「（やべ!）ニトクリスの鏡!」

「え?」

パリン!

まるで鏡のようにデモンベインは割れた。

『油断しすぎだぞ!』

「わかってる！バルザイの偃月刀！」

『了解！』

偃月刀を構えたデモンベインとダリアが激突する。
そして、ファサリナは不気味な笑みを浮かべた。

「近づきましたね？」

「なに?!」

突如、ダリアの身体から謎の蒼い液体がデモンベインにかかる。

「なんだ、これ……って動けない?!」

『蛮、これは』

「この液体は空気に触れるとすぐ固まる特製があるんですよ」

「チッ」

「ふふ、これであなたと私は離れられない」

デモンベインの両足はその液体により固定されてしまい身動きが取

れない。
対して、ダリアは自由だ。彼に抱き着くようにデモンベインに纏わりつく。

「このままあなたの唇を奪ってしまおうかしら」

ファサリナはデモンベインの頭部に近づく。装甲を纏っているため、蛮の素顔は見えない。

「言っただろ？俺、童貞なんだよ。だから、俺の純血も純液も渡せねえんだよ！！」

デモンベインの機体各所が光、閃光する。同時に、封じられていた足は解放された。

「アル！」

『アトラック・ナチャ！』

蜘蛛の糸は確実にダリアを捕える。だが、問題はその捕え方だった。りする……。

「あん」

『お主……』

「……嫌、お前だろ」

俗にいう……亀甲縛りという奴だった。

「大神さんったら、こつというのが好きなら言ってくれれば……」

「『……』」

逆効果だった。

これ以上は不味い。色んな意味でだから。

「チエスト……!!!」

痴女、断つべし。

「あ~~~~ん」

「……」

最後まで締まらなかった。

「え、シマる？」

「もうヤダ」

翌日

今日もいい天気だ。こんな日に授業に出ている俺はなんて真面目なんだと思う。昨日のことなんて嘘みたいだ。

「えーと、ではこの問題を」

ただ……。そう、本当。なんで、どこで俺は道を間違えたのか。

「大神さん、解いてください」

「どうなったらお前が俺の隣で授業を進めてんだよ?!」

そう、今日の授業で再びファサリナがやってきたのだが。なぜか、
蛮の隣に椅子を置いて授業を進めていた。黒板に文字を書く以外ほ
とんど彼の隣にいる。

「そもそも、俺が勝ったんだから俺に近づくなよ!」

「あら、私は負けたらあなたを追いかけないと言っただけですよ?
別にあなたの隣で授業をしないとは言ってません」

「こ、この……!」

「それに、私」

「なんだよ?」

「あなたの隣にいたいんです」

そう言っ腕を組んでくる。その大きな胸の感触にドキツとするが
すぐに振り払う。

「ええい!そもそも、お前年いくつだよ?」

なんで、そんなことを?とファサリナは思ったが素直に教えた。

そして、その驚愕の数字に驚く。

「う、嘘だ……。2ぴくなんて」

「あら、そんなに堂々と言わないでください。でも、私と大神さん・
・お似合いですよね、きゃ」

「きゃ じゃね」きゃ、じゃありません! 『え、ラウラ?』

間に入って、名乗り出たのはラウラだった。

「私が、蛮殿のお嫁さんになるのだ!」

「あら、でも私の方が女性としての魅力はありますけど?」

腕を組んで胸を強調し、ぷいっとお尻を突き出す。

彼女の場合魅力という言葉ではあまり言い切れないぐらいだとは思
うが。

「うう……」

ぺた……

既にその効果音だけで虚しいだけである。

「わ、私だってまだ可能性が！」

「あなたの頃には私、ブラがきつかった記憶がありますね」

「う……」

「もう、やだ」

『本当、いつのまにフラグを』

「フラグなんて嘘だ。嘘だ、嘘だ、嘘だ……」

その後、授業はもちろん当のファサリナが放棄したため授業は潰れた。

壘は自分の愚かさを呪っていた。

「不幸だ————！！！！」

第十五話 俺の心はガラスでできている（後書き）

フアサリナさんの口調って意外と難しい。でも、知っている人なら脳内保管で問題ないよね。

フアサリナさんのISもまんまダリアなんでそんな大差ないです。ぶっちゃけ今回はアニメと似たような展開も多かったと思います。

前回と同じく、蛮にはかっこいい童貞宣言を言ってほしかったただけだったり……。

第十六話 BANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBAN(前書き)

タイトルはまあ、わかる人はわかるアレ。

タチの悪いアレ。

でも、違っから安心してね！

今回もシッコミミゴころ満載

第十六話 BANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBAN

タッグトーナメント戦が終わってから少しの時間が経った。一年ではそろそろ臨海学校があるらしく皆騒いでいる。

しかし、臨海学校か。もう、15年も前だよな……。懐かしいぜ。俺はちよつと行っていないが。確かあの時は……。アメリカで……。

「ん？」

すると、窓の向こう。空の上。何かがこちらに向かってくる。

「へりだな」

あれ、ここ法律とか国家に属さないのでは？

『おい、蛮。瑠璃からメールが届いたぞ』

と携帯ストラップ人形もどきことアルさんが机の上で言ってきた。

周りから見れば人形に話しかけている奴にしかみえないのだ。

「内容は？」

『ちよつと、アメリカに行ってください。以上』

「は？」

『大神蛮。至急応接室に来なさい。繰り返します』

「なんだ？」

とりあえず、応接室に向かった。

道行く視線が相変わらず向けられているのは仕方がないのもうわかっていた。

『とういうわけで、応接室前だ』

説明どうも。

「ちーす。大神蛮、参りました」

そう言いながら扉を開けた。そこには、白人の男が二人。それと、内の担任が二人。

俺が入ると男性二人が立ち上がった。

「お久しぶりだな、蛮」

その内の一人は知り合いだった。

「少佐……か？いやー、老けたな」

「ふ、相変わらずだな」

目の前にいるおっさんは通称ゼロ少佐。まったくもってどごぞのス
ニキングミッションの少佐じゃないよ！

「まあな。で、隣は部下？」

「ああ」

「どうも、ケビン・ホーク中尉です。あなたに会えて光栄です」

「（光栄だつてよ）」

『（お前が？ありえんな）』

「（大神さんが讃えられている）」

「（明日は槍が降るか?!）」

まったくもって信じられていなかった。

「で、少佐が態々なんのようだ？」

「ちなみに、今は昇進して准将だ」

「は、すみませんでした。准将殿」

ワザとらしく敬礼してみた。

「別に少佐でも構わん。実をいうとそつちのが響きがいいのでな」

「そう。まあ、本題に入ろうか」

「あの・・・私達は？」

「アレ、真耶ちゃんとその他。まだいたの？」

「（扱い酷いです!）」

「一応私達はお前の担任だから」

「ああ、これからはプライベートだから。出てってくれ」

「……」

「私からも頼む」

「……わかりました」

意外と素直に言うことを聞いた二人は部屋から出て行った。それを確認すると蛭はソファに座った。

「で、改めて聞くけどどうしたんだよ？」

「ああ。実は、今私が預かっている基地ではある試験が行われていてな」

「つて、基地司令かよ……。
昇進したな……。」

「大神さん、こちら見てください」

すると中尉が何やら紙を渡してきた。それを、俺は受け取り軽く眺めていた。

「無人戦闘機の実用化……？実現させたのか？」

「それも、完璧に近いのを」

「完璧？」

なんでも、シュミレーションで人間には不可能なミッションもその無人機なら可能。

さらに、実用性のために実戦投入し成果を収めたと言う。しかも、対IS戦闘も今後は想定しているらしく国防省や大統領はこの無人戦闘機の配備を本格的に考えている。

つまり。

「そうなると現役のパイロットはクビか」

「そうだ。ただでさえ、ISの登場で戦闘機の価値は低下している。これでは、パイロット及び我々も含み路頭に迷うだろう」

「成程ね。で、俺にどうしてほしいわけ？それでも、俺約十年のブランクあるんだけど？」

「わかっているではないか。それに、お前にブランクは意味ないだろう」

「よくわかってますこと。で、俺にどうしてほしいんだ？」

俺はニヤケた顔で言ったに違いない。それに、少佐も笑っている。

「お前には、今度行われる最後の試験の相手として出てもらう」

「つまり、有人機対無人機というわけか」

無人機に勝って証明しろと言うのだろう。人間様舐めんなって。だが・・

「ただ、勝つんじゃないだろうか？」

「ふ、やはりお前にはわかるか。試験中にたまたま事故が起きて無人機の墜落。幸い、機体はまた一機のみ。あとはこちらでやる」

「ふーん、色々絡んでいるみたいだな」

「それはお前の知るところじゃない。で、どうだ。引き受けてくれるか？」

「引き受けよう」

「おお、ありがとう」

「それじゃあ、いきましよう。すでに、小型のジェット機を用意していますので」

「了解だ」

そして、俺は簡単な身支度を整え空港へ向かいアメリカへと飛んだ。

そこで、俺は思いがけない再会を果たした。

アメリカ空軍基地

ジープに乗って俺は空港から基地へとたどり着いた。基地司令部に移動中、その例の無人機の姿が見えた。赤いフォルムにまさに人を必要としていない形となっている。

「あれが」

「そうです、あれが無人戦闘機コード名『ゴースト』です」

「幽霊・・・ねえ」

合っているような、ないような。

その後、すぐに基地司令部へと案内された。少佐、まあ准将は一応この基地司令らしい。本当、出世したよ。

「蛮、ここが基地司令部だ」

少佐に紹介され入室した。
そして、そこには・・・

「久しぶりだな、チエリー・ポニー童貞」

そこには、俺のその名付け親であるあの女がいた。

「久しぶり、お婆『シュツ！』ちょー!？」

俺はいきなりナイフを投げられた。
まあ、避けたけど。

「いきなり、なにすんだよ！」

「なんだ、意外と鈍っていないじゃないか」

「それが、久しぶりに会ったあいさつかよー！」

「まったく、お前は変わっていないな」

「あんたは、老けたけどな」

「それは、お前もだ」

今更だが、紹介しよう。アメリカ軍所属元特殊潜入工作員のザ・ボスと呼ばれていた女性。

ちなみに本名はキャサリン・・・ww。

「で、なんであんたがここに？」

「お前がまた飛ぶと聞いてな。態々、見に来てやった」

「そりゃあどうも。で、俺の機体は？」

「こつちだ」

しかし、あの無人機と戦うにはそんなじゃそこらの戦闘機じゃ無理だ。人が乗っていないことを考えている分、無人機には限界がない。人が越えられない壁を越えられる。

『（吾には無理だと思いがな）』

するとアルが念話で伝えてきた。

「（どうしてそう思う？）」「

『（まず、話を聞く限り例えお前が凄腕でも勝つのは難しいと思う

が。というか、お前が戦闘機乗りだったなんて聞いておらんぞ！」

「（言っていないからな。まあ、昔色々とな）」

『（ええい、話さんか！）』

「（それは、あ・と・で）」

『（むむ！）』

「ここが、お前の乗る機体がある格納庫だ」

気付けばすでに格納庫前。

扉が開き、中に入る。そこには、布で覆われた一機の戦闘機が確かにあった。

「これは……」

なぜだろう、俺はこいつを知っているぞ。

機体に歩み寄り、コックピットへ上る梯子を上り、に機体かけられていたシートをはいだ。

コックピットの前、機首に雪風と書かれていた。

「……雪風」

雪風。かつて、俺が参加した『スーパーノヴァ計画』で開発された機体。愛称は俺が付けた。初めてみたとき、真っ白い機体だったために俺はそうつけた。元々の機体名は【YF-19】当時では世界最高峰の機体として活躍を見せたのだが……。

俺にしかりこなせなかったんだ。だから、俺が除隊してからは展示品になったか、研究開発の試験に再び駆り出されたと思っていたのだが……。

「あの時の原型を留めていないな……」

「お前が除隊してからノヴァ計画は密かに続いていた。実は、雪風はお前が去ったあと無人機計画が発足されてな」

「成程。人が乗れなければただの鉄の塊だもんな」

「そうだ。だが、ある時期に雪風と関わったスタッフや設計者が雪風は人が乗ってこそ完成された機体だと言ってな。そのまま、かつての特殊戦を改良し、機体もステルスに特化した特殊偵察戦闘機【雪風】として生まれ変わった」

「凄い、これが伝説の機体。私も初めて見ました」

中尉もどうやらかなり驚いているらしい。しかし、本当に驚いているのは彼だ。

蛮はキャノピーをあけ、コックピットに座る。

「それと、心理分析用ソフトMac Pro?をインストールした。その言語エンジンの応用である程度我々の言葉を理解できるのだが・・・」

「どうした、何か問題が?」

「流石雪風と言ったところか。理解できるではなくしているのだ」

「・・・?」

「とにかく何か喋ってみろ」

少佐に言われてとりあえず喋ってみた。

「俺がわかるか、雪風?」

・・・声紋認識 大神蛮と認識

「覚えていたのか?」

・・・あなたが私を降りてから、私はあなたをずっと見ていた

「は?」

・・・衛星を仲介し、街の監視カメラを覗き見し私はずっとあなたを見ていた

「少佐、こいつ軽く犯罪犯してるんだけど？」

「そうだったのはお前が原因だ」

頭を抱えているところを見ると前々から知っているみたいだ。

「で、相手は無人戦闘機だがやれるか？」

・・・勿論 私とあなたが居れば勝てないものなどない

「そうだな」

・・・それに

「ん？」

・・・また、あなたと飛べるのが嬉しい だから おかえりなさい

「ああ、ただいま」

空軍基地 客間

あのと、蛭は基地で用意された部屋で一杯やっていた。アルも缶ビールにストローを刺して飲んでいるがどうも機嫌がよくない。

「なあ、なんでお前そんなに機嫌が悪いんだ？」

『うるさい、このうつけめ』

「嫉妬か？」

『ち、違うと言っているだろう！このうつけ、うつけ、大うつけめ』
『！』

若干酔っているな。

「まあ、昔の相棒だからな」

『・・・嬉しいのか？』

「まあな。昔の俺はよく憧れてた。F1をみては、俺も走りたいて。空軍に入ってテストパイロットになったのも同じ。だから、嬉しいよ」

『・・・そうか』

「ま、今の相棒は手がかかるから大変だよ」

『なにを！いつも、お前の世話をしているのは吾だぞ！』

「はいはい」

これでもお前には感謝してんだよ、アル。

子供の頃の夢はさ、誰もがロボットに乗りたいてって思っただけさ。俺は、その願いが少し叶えられたんだからな。

コンコン

「ん、誰だ？」

「私だ」

「ああ、ボスか。開いてるからどうぞ」

入ってきたボスは、片手に酒とグラスを持って入ってきた。

「改めて言うが、あの小僧がこんな大人になるとはな」

「ちなみに聞くけど、あの頃俺ってどんな餓鬼？」

「ん？今も昔もチエリーボーイだろう？」

「それ、答えになってないぞ」

「いいだろう。お前にはそれがお似合いだ」

「どうも」

二人は酒を酌み交わし昔の思い出を語っていた。一人置いてけぼりがいるのは秘密だ。

「それに、お前がいなければ私はここにいない」

「あー、俺も助けに行ったのが三十路のおばさんだって知ってれば助けなかったのにな」

「一応訂正だが、その時はまだ三十路前だ」

「……ま、まああれだな。俺もよく単独で助けに行けたよな」

目をそらし必死に話を変えた。

「それは、機体とお前の腕がよかったからだろっな。まあ、大半が雪風のステルス性能とクラッキングのおかげだが」

「褒めたの最初だけ!？」

「ところで蛮、会った時から聞きたかったのだが」

「さらにスルー?!」

「この人形はなんだ？」

「酷い……」

まさに、ボスは蛮の天敵……なのか？

それはさておき、蛮はボスならいいだろうと思ひ。

「……アル、喋っていいぞ」

『初めましてだ、人間。吾の名は、アル・アジフだ』

「人形が喋った？」

意外にも落ち着いた様子で答える彼女。

「細かいことは気にすんな。ていうか、説明がめんどい」

「で、アルよ。お前とこいつはどういう仲なのだ？」

『簡単に言えば、相棒だな』

「成程。アルが今のか」

彼女はその鋭い洞察力である程度は理解していた。今のと言ったのは、かつての相棒が雪風。そして、今がアルだと。

「で、本当に勝てるのか？」

一瞬にして空気が変わる。冷たく、鋭い空気に。

「勝てる、か。まず、俺にはブランクがある。次にまだ雪風をまとも動かしていない」

「それは問題ないだろう」

「どうして？」

「お前は『だって、俺訓練より実践じゃないと本気出せないし！』。と、言っていた男ではないか」

・・・なんで、こんなにギャップがあるんだよ?!

『なんだ、そのありきたりな展開』

「若気の至りという奴だ」

「結局を言えば、私はお前が負けるとは思っていないということだ」

「そりゃあ、どうも」

それから、少し飲み交わした後彼女は部屋を出て行った。
蛮も明日に備え、深い眠りについた。

翌日

その日は、素晴らしいと言ってもいいぐらいの飛行日和だった。
滑走路には既に二機の戦闘機がスタンバイされていた。
一方は赤い機体。無人戦闘機『ゴースト』。もう一方はかつて最強
と呼ばれ、一時は記録に消え蘇った機体『雪風』。

『チエリー1聞こえるか?』

無線を通じて司令部にいる少佐の声が聞こえる。

「チエリー1よりマザー。こちらは問題ない、いつでもいける」

『了解だ』

一旦無線機を置いて少佐こと准将は同じく司令部にいるゴースト開発スタッフメンバーにも声をかける。

「そちらもいいですか?」

「ええ。ゴーストに問題はありません。まあ、かつて伝説と呼ばれた機体を使っても負けるとは思えませんが」

白衣に眼鏡と、憎いキャラがそう言いながら眼鏡を持ち上げた。

「了解しました。では、試験開始!」

『(蛮・・・勝てよ)』

残念ながらアルはボスと共に見守る側に今回はいる。
今まで戦ってきた仲だからこそ、今回は歯がゆいし悔しくもある。
それでも、今は祈るだけだ。
あいつが、勝つことを。

ここからは戦闘描写ですが、戦闘機の操縦はそんなに詳しくないので己の妄想力を広げてドッグファイトをお楽しみください

「さあ、踊ろっぜ！幽霊さんよ！」

開始の合図とともに蛮は機体の出力をあげ加速をつけ、飛び立つ。
同じく、ゴーストも飛び立つ。
そして、先に仕掛けたのはゴーストだった。

「おっと」

軽く操縦桿を捻る。
すぐ横を赤いビームが通り過ぎる。

「やっぱりビーム兵器か。試験は元々名目上で、互いのつぶし合いのようだな」

．．．元々あの機体の装備はあのビーム砲のみ

「だから、シミュレータでしか戦績がないわけだ」

．．．作戦は？

「まあ、なるようになれだ！」

さらに速度を上げる。ゴーストもそれに反応し加速する。

先頭が雪風、それを追いかえるようにゴーストが迫る。そして、後方から容赦のない攻撃を何度もかわす雪風。

「ビーム兵器がテメエだけだと思ふなよ！」

雪風の機体の真下。大きさでいうならそれほど大きくない。球体型に煙突が生えたものを想像してくればいい。それが、後ろに向けられ放たれる。

不意打ちのつもりで撃ってもゴーストも攻撃をかわす。

「ッ！」

．．．普通のやり方では勝てない どうする？

「なに、人間様にしかできないようなことをやればいいのさ」

雪風に問われ、蛮は笑って返す。

そして、蛮は一旦機体を上昇させ次に一気に急降下し始めた。

突然の動きではあったがゴーストもすぐに追撃する。雲を抜け、現れたのは青。海だ。

このままの速度を維持し続けたまま落ちてゆけば海へと墜落だ。

．．．成程 あなたらしい

そんな状況の中でも雪風は平然としていた。機械だから慌てるというのもおかしいのだろうが。

「だ、ろ？ だったら、わかる、な？」

．．．了解

減速せず、速度を維持するどころか段々と上がっているため蛮にGがかかっている。ISにはハイパーセンサーがあり急激な速度を出しても景色はゆっくりとみえるしGもかからない。これが、ISパイロットと現役戦闘機パイロットの差であると思える。

今まさに蛮が行っているのはデスレースに近いものだ。車で言えば、トップスピードで走りどちらかがブレーキを踏んだら負け。しかし、踏まなければ崖に落ちる。

似てるようで違うかもしれない。

しかし、蛮が行っていることはそういうものだということだ。蛮は人間だ。危険だと思っただらそれを止めることができる。それができるのは意思を持った生物のみ。

だが、機械にそれができるのか？機械は所詮機械。プログラミングされて初めて動くものだ。

今の状況をインプットしているかどうかはわからない。

これは、賭けだ。

「
」

そして、蛮は動いた。スロットルを一気に手前に引き減速をする。ゴーストはそのまま雪風を抜く。

「雪風え！！」

．．．．アタック

雪風が機体に備えられているミサイルを発射。蛮が行わないので、ロックオンまですべて雪風の操作で発射される。

ミサイルがゴーストに迫る。ゴーストも状況に気付き緊急回避を行うが．．．。

ドオオオオン！！！！

そして、爆発。蛮は機体を水平に再び保ち、少しずつ上昇していく。爆煙が晴れ、何かが飛び出した。

「チツ！」

機体状況を見るに、無傷ではない。

蛮は、出力をあげようとしたその時だった。一筋の光がゴーストを貫いた。

「なに?!」

・・・目標11時方向

「あれは・・・」

その先には人の形をした機械が飛んでいた。

「あの時の」

それは、いつかのトーナメント戦で乱入してきた機体と似ていた。しかし、考える暇もなく敵はこちらをロックオンしてきた。

基地司令部

雪風がアンノウン、後にゴーレムと呼ばれるこの機体と遭遇した同時刻。司令部でも状況はつかんでいた。

だが、基地のレーダーは反応せず。いつ侵入されたかわからない状態だった。

しかし、上司がいいのか。部下たちは動揺はしたもののすぐに冷静を取り戻し状況を確認していた。

「やはり、ハッキングとしか考えられません」

「だが、一体誰が？」

少佐、ここでは准将と呼ぼう。准将もまたその可能性が一番高いと考えていた。

しかし、それが一体誰なのかわからない。

「恐らく、それに該当するのは一人だろう」

それを切り出したのはボスだった。

准将もそれを聞いて気付いた。

「ああ。確かに、そうですね」

「目的は……雪風か、それとも」

「後者はありませんな（笑）」

「ああ、ありえん（笑）」

「「「「ですよねー」」」」」

なぜ、彼らがこうも笑っているのか。彼らは、彼を知っているからだ。彼がどんな人間なのかを。だからこそ、例え彼が狙われようともそれは叶わないのだ。

なぜなら、蛮は……アレだから（笑）

どうでもいい豆知識。蛮は霸道財閥によって守られているよ！別名とともいえるね！

ゴーレムとの戦闘開始から24分

．．．．．蛮

「なんだ?!」

．．．．．予想以上に燃料の消費が激しい

「残り戦闘可能時間は?!」

．．．．．残り戦闘可能時間 28分53秒．．．．．

「ッ!」

状況は最悪か。なら、方法は一つか．．．．。

「雪風、お前のプロテクトを解除する」

蛮はそう言ってコントロールドパネルのボタンを押した。すると、小さなキーボードが起動。蛮は一時的に雪風にコントロールドを任せ、プロテクトを解除する。

．．．．．「ご要望は？」

雪風は機械の癖にこの台詞には、彼女？が笑っているように聞こえる。

「お前の好きなようにやれ。で、時間はどのくらい欲しい？」

．．．．5分

「了解だ、レディ」

そして、コントロールは再び壱に返される。当時にモニターには高速で文字が表示されていく。

．．．．20%

あえて言うなら、ここから雪風の本領発揮と言える。簡単に言えば、電子戦。敵地に潜入する時、雪風は敵の基地に入り込み偽装し。目を盗み、機械があるところなら雪風はすべて己の支配下に置くのだ。

「さあ、相手をしてやる！」

だが、それともう一つ。その雪風を操ることができるのが大神壱。ただ一人。

「遂にISを戦闘機で倒す男の誕生だ！」

この余裕こそ、彼らしいと言えるのだろう。

蛮は機体を海面近くを飛行する。そのわけは、いくら雪風の性能が戦闘機のトップクラスとはいえ相手はISなのだ。ISは、戦闘機とは機動性では上だ。だからこそ、下を取らせないためにこの戦いかたをしている。

隙をみては蛮も反撃しているが、やはりISにはシールドエネルギーがあるため防がれる。

板野製ミサイルでも華麗によけ塞がれた。

「おいおい、特注の板野ミサイルだぞ？」

自慢のミサイルが簡単に避けられて少しショックの蛮だった。

「やはり、ウエスト特製じゃないとな・・・おっと」

少し余所見していたら撃たれそうになったがすぐに避けた。

「そろそろ弾薬も底を尽きるか」

ミサイルはさっきので終わりだ。さてさて……。

P i

…… 100%

「ん？……どうした、二分速いぜ？」

……意外と簡単だった

「そうか」

……でいいの？

「ああ、やっちまえ！」

……了解

直後、ゴーレムに異変が起きる。

機体をくねくねと動かし、そしてだらつと垂れる。

……まずは足

すると、ゴーレムの両腕のビーム砲が両足を撃った。

……次に腕

今度は互いの砲身を向けあい、撃った。
両腕が吹き飛び、残ったのは両腕、両足を失った無様な鉄屑だった。

．．．．最後はどうぞ

「そりゃあ、ありがてえな!!」

雪風は速度をあげる。そして．．．

．．．．シールド解除

ゴーレムのシールドを解除した雪風。同時に、機体後方の部分からアンカーが射出。ゴーレムを捕える。

「さあ、盛大にいこうぜ!」

速度をあげ、基地上空へと向かう。それは、司令部でも確認していたのだが．．．。

「指令、なぜか雪風がこちらに戻ってきます」

「おいおい、まさか」

そして、滑走路上空。アンカーでゴーレムを引き連れてきた雪風は、急上昇しそのまま急降下。

「さらにおまけだ!」

今度は機体を回転させた。

「スクリュードライバー!!!」

ある高度でアンカーを外し、雪風は機体を保つ。だが、ゴーレムはそのまま回転しながら地表へ落下した。

結果から言えば、蛮と雪風の勝利となった。ちいさなクレーターを作って。

ぶっちゃけこんなことできないけどね(笑)

「ふ、戦闘機は心で動かすんだよ。心でな」

*** 某不思議の国の世界***

「あらら、たかが戦闘機ごときにゴーレムが負けるとは

びよこびよここと耳を動かしている謎の女。

「でも、ハッキングの形跡が……。私のプロテクトをたったの三分で

人間業じゃない・・・かも？

「・・・ん？」

すると目の前のモニターに変化が。

「え、どうぞ、プレゼントです？3、2、1・・・！」

ドオオン！！

そして、周囲にある機器が爆発した。

煙が晴れるとあら不思議。アフロを被ったアリスちゃんのできあがり。

「ふ、ふふ。僕をここまでコケにして・・・許さないんだから！！」

・・・してやった

「どづした？」

・・・なんでもない

「そうか」

後日 日本行きへの帰りの便にて

「……」

『どうしたのだ？』

「ん？」

飛行機の中で窓を見ながら少し憂鬱になっている蛮をアルは声をかけた。

277

『なんだ、寂しいのか？』

「まあな」

寂しいと言えば寂しいのだろう。だが、それと同じくらいまた会えるような気がする。だって、あいつがあんなこと言うんだから。

帰国する直前

仕事を終えた蛮は帰国するための準備を整え、最後に雪風と別れのあいさつをしていた。

「それじゃあ、俺は今日で帰るから」

・・・そう

「そうって。なんか、別れにしては質素すぎないか？」

・・・問題ない

「なにが？」

・・・秘密

・・・

「てな、感じだったしな」

『つにゆ』

「それにわかったことがある」

『あえて聞くが、なんだ？』

「やっぱり、女性はジャパン！大和撫子！」

『だと思った』

こうして、蛮の短い旅が終わった。

・・・また、会いましょう 蛮

『 ふうふう』

どうでもいい次回予告

「どうも！アル&壘のトンカツには醤油派の壘です！まったく、アルのやつが家から消えちゃった。これは、事件の匂い。え、違う？！」

次回 喧嘩する程仲がいい、じゃなくて喧嘩できる程仲がいいのだ？
え、同じやね？

第十六話

BANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBANBAN(後書き)

なぜ、こんなことをしたかった？

まあ、落ち着けよブラザー！

これは大事な伏線なんだ。おっと、言っちゃまった。

なに、話の内容はともかく、雪風が大事なんだよね！

あと、最近ブランクぽいっす。

でも、数話は完成してるけどな！

第十七話 ちびアルの家出（前書き）

アルが家でしたようです

第十七話　ちびアルの家出

それは、蛭とアルが休日を使い実家に帰ってきた時の事。
ぶつちやけ、彼の実家がどこにあるのか。家族構成とかは・・・
今は秘密だし、今は関係ないのでツツコミはナシだぜ！

『おい、蛭。折角の休日なのだから外に出たらどうだ？』

蛭の部屋に入ってきたアル。

しかし、そこはカーテンを閉め切り照らされているのがパソコンの光。

「今、そに子とまうまうしてるから嫌だ」

『このうつけめ。外に出なくてもいいから、飯ぐらい食ったらどうだ。今日は折角吾が作ったのだぞ？』

その小さな身体でどうやって作ったのかとは言ってはいけない。

『今回はなんと卵焼きだぞ！しかも、厚焼き！』

それは、ある意味凄いことなのだろう。想像してみる。あの小さな身体・・・で、フライパンを巧みに扱い、しかも厚焼き玉子を作ったのだ・・・。

アリエナイ・・・。

「んー、あとで・・・ッ！また、戦場Endかよー！」

『蛮、吾の話をちゃんと聞いているのか？』

「あん？なに？これから、ミクさん衣装で世界征服するんだけど？
ていうか、飯いいや」

『・・・・・・・・の』

「あ？ヘッドフォン越しで全然聞こえない・・・」

『このうつけ、うつけ、うつけ、うつけ、大うつけめ！もう、知らんー！』

ひゅ~~~~~

言いたいだけ言って、アルは飛んで行った。
しかし、蛮は何も思わず再び画面へ。

「なんだよ、あいつ」

【ちびアルの大冒険！】

スタート！

「あの馬鹿！折角人がご飯を作ったというのに・・・」

アルは家を出たあとふよふよと街を彷徨っていた。

「そもそもあいつは吾に対する扱いがおかしいのだ！」

それは、否定はできない。

蛮が起きない〃アルが起こす

寝ぼけて服を着ない〃アルが着せる

ご飯を作らない〃アルが作る・・・e t e

この時点で、通い妻と言ってもいいぐらい否定できない。

「まあ、これで吾がいなくなれば蛮は・・・」

ぼわわーん

『うわーん！アルがいないとご飯が食べられないー！ー！ー！』

『アルがいないと服がどこにあるのかわからないー！ー！ー！』

で、そこに吾が登場すれば・・・

『俺はアルがいないと駄目なんだよー、アルいやアル様〜〜！ー！』

「になるに違いない！」

妄想が膨らむアルさんでした。

「しかし・・・ここはどこなのだ？」

アルは迷った。

「改めて思うが、時代は変わったのだな・・・」

アルは自称4千年生きている。彼女が生まれた時代と今を比べれば圧倒的な技術革新をしている。

こんなにも高いビルや建物などなかったのだ。移動手段も徒歩か、馬。

「それは、ともかく。どうやら、見知らぬ場所へ来てしまったようだ・・・」

あえて、迷子になったとは言わないアルであった。しかし、そこに黒い影が。

「おや、新入りかい？」

「にゅ？」

振り向くとそこには、赤いスカーフを身に着けている猫が現れた。

「ここらへんじゃ見ない顔だね。どっから来たんだい？」

「どこと言われても、ただ飛んでたら見知らぬとこに来ただけだ」

「それを迷子っていうんじゃないのかい？」

「う。違うぞ、迷子ではないのだ！」

「ふ、そうかい」

ね、猫に鼻で笑われた！

その頃、原因の蛮さんは

「あー、目が疲れてきたな。おーい、アル。ウエスト特製超目がよくなるけど、良すぎて困っちゃうドリンク持ってきてくれー」

数分後

「おーい、アルー」

10分後

「アル？」

流石に気になって蛮は自室から出て家の中を探し回る。

「いねえな。もしかして、どこかに行ったのか・・・ん？」

台所にいくとラップをしていない朝食が。

「これは・・・事件の臭い!？」

違います

「どうやら、違うらしい・・・。きっと、全身黒人間が何かをしてみましたと」

腕を組んで状況を整理する。

「うーん、アルの奴。所謂あれか、反抗期か。まったく、仕方がないやつだ」

蛮は部屋に戻り、なじみのタキシードを身に纏った。

「おっと、こいしめっ」と

さらに、お気に入りのとんがり帽子も身に着け蛮は家を出たのであった。

「とうわけで、あやつはまったくもってどうしようもないやつなのだ」

「はいはい」

アルは猫こと、ニヤムサスと言う名の猫の上で愚痴を言っていた。

「にしてもアンタ。よっぽどそいつのこと好きなんだねえ」

「な、わ、吾はその……!……!」

「若いねえ」

自称四千年だが。

「それに、あいつは吾のことをそんな風には思っておらん」

「それは、どうしてだい？」

「・・・多分、相棒としか思っておらん」

「で、あんたはそれでいいのかい？」

「きつと吾も男としてではなく、パートナーとしての感情だと思っている」

「なんでだい？」

「自分もよくわからんのだ。これが愛の感情なのかと。それでも、時々思ってしまうことがある」

「それは、なんだい？」

アルは悲しいとは違う。辛いとも違う。アル自信もわからない感情だった。

「あいつは、蛮は、ワザと嫌われるようなことをしているように思えてくる」

「なんで、そんなことをする必要が？まるで、自分と関わってほし

くないみたいに聞こえるよ」

「吾にもわからん」

「そうかい」

そんな重い空気が流れる中、それを壊すように腹の虫がなった。

「それじゃあ、飯にするかねえ」

「吾はいらんぞ」

「あらまあ、いい魚が貰える所知っているんだがねえ」

「吾は生では食わん！」

同じころ蛮は

「あ、腹減ったな。仕方ない、いつものところいくか」

街に出て搜索を開始した蛮だったが、ちょうどお昼頃なので腹が空

腹になっていたのだ。
とうとうわけで、やってきたのはす家。

「いらっしやいま……!」

「あー、今日は何にするかな」

なぜか、店員は蛮の顔を見て青ざめた。そして、厨房の方へいき。

「店長!あ、あの【す家の蛮】がやってきました!」

「な、なんだとおー!」

「う、嘘だろう。朝昼晩、しかも三時のおやつとか言って一週間ここに通り続けて、さらに全メニューキングサイズを頼んで全メニュー制覇したあの男が帰ってきたのか!」

「凄いのはそれじゃねえ。キング食ってもひよろつとしてんだぜ?しかも、デザートにコーラフロートLサイズ頼むんだ」

ちなみにすべてのメニューがキングとは限りません。

それとキングは隠しメニューだよ!近くに店がある人は行ってみよう!

「たく、水もださねえのかよ……」

「す、すみません！そ、そのご注文は・・・」

「そうだな・・・」

店員は唾をのむ。

今回は一体なにを頼むか？王道の牛丼か？それとも、期間限定のあれか？それとも、キングか？

「じゃあ・・・」

「」「」「」「」「」

「・・・あ」

「（な、なんだ。どうしたんだ?!）」

「やべ、金なかったんだ」

そういつて水だけ飲みほして店を出て行った。

「・・・」

「」「」「・・・なんだろう、物凄くほっとしているのにこの敗北感」「」

結局蛮は、飯を食わずアルの搜索を再開した。

夕方

「で、夕方だよ」

「誰に言っているのだ？」

「秘密だよ」

「うにゆ」

「まあ、なんだかんだでこんなところまで来たけどさ」

こんなところとは。まあ、街なのだが夕方になってもやっぱり人は多い。

「帰らないのかい？」

「いいのだ。あいつは、きっと今頃画面に向かって2828していることだろうよ！」

「ふう。……ん？もしかしてあれじゃないのかい？」

「ん？」

ニヤムに言われて、見た視線の先には黒いタキシードを着た男がいた。

「おい、アルう。どこだー。チップチャップスあげるから帰ってこーい」

「……………」

壺は自販機でみつけた100円でチップチャップスを買ったのだ！

「アレでも相棒なんだろう？だったら、一緒にいなきや意味ないだろうっ？」

「そ、それは……………」

「喧嘩するってのは悪いことじゃないわ」

喧嘩する程仲いいというが。言い換えれば喧嘩できる。それだけの関係を築いているってことなんだと思う。

「……今日一日世話になった」

「ま、また喧嘩したらまたきなよ」

「うぬ」

別れを告げ、アルは壱の下へ飛んで行った。

そのあと色々言い合ってたんだかんだで仲良く帰っていった二人がいた。それを、みたニヤムサスは。

「まったく、人間ってのは大変だねえ」

帰宅

帰りの道。アルはいつものように壱の頭の上にいた。チャップスを舐めながら。

「で、どこに行ってたんだ？」

『どこでもよかるつ』

「はいはい」

結局はいつも通り。とアルは思った。

『なあ、蛮』

「ん？」

『お前は、人間は好きか？』

アルは気にかけていたことをついに言った。

「イケメンは嫌いだ」

『ふ、お前らしいよ』

いつも通りの返答に少し胸が軽くなったアル。
だが、帽子の上にいたアルにはその時の蛮の顔は見えていなかった。

それを聞いた時の彼は顔は険しかったのを。

後日

「まったく、あいつという奴は！」

「来るの速すぎないかい、あんた」

「なぜ、トンカツに醤油なのだ！普通はソースだろうに！」

「じゃぶ」

第十七話　ちびアルの家出（後書き）

ちなみに俺自身も醤油派

ちびアルのということですのでその次も予定しています

それと、どうでもいいんですけど最近ほのぼの系を書きたいとなぜか思っている自分がある。

なぜだろ・・・戦争ばっか書いているからなのか・・・？

童帝が逝くをシリーズかしてやるうかしら・・・

第十八話 夜のお仕事 寝不足はお肌の大敵（前書き）

最近ふと思う。別にISじゃなくてもよかったなと。

第十八話 夜のお仕事 寝不足はお肌の大敵

夜の街。一部を除けば、人などいない。まさに、闇が支配する時間。かつて、人は夜を恐れた。それは、何故か？

簡単だ。悪魔がでるからだ。

そう、まさに悪魔。

人々はかつてこう呼んだ。降魔と。

「キシヤアアアアア!!!」

降魔は夜の公園に現れていた。しかも、四体。だが、闇あるところ光あり。

魔を狩る者、ここに在り。

「ふん！」

「ギシャアア!!」

その内の一体は首を落された。

「「「!!!」」」

仲間が死んだことに気付いた残りの三体は同時に獲物を見つけた。
人間だ。餌だ。

だが、その餌は極上の毒付きの餌だ。

「今日は四体、残り三体か。さっさと、片づけるか」

その餌の名は大神蛮。
魔を断つ男、蛮である。

蛮は走り、降魔との距離を縮める。しかし、降魔も黙ってはいない。
口から酸と思わしきものを蛮に向けて吐き出す。
蛮は、それを避け迫る。

「はぁぁぁぁぁ!!!!」

降魔の頭部に乗り、刀を突き刺す。そのまま、クトウグアを構え目の前に一体に銃弾を数発叩き込んだ。

「ラスト！」

首を切断し、飛び降りる。
もう一つ、刀を手に取り。

「狼虎滅却・・・快刀乱麻!!!」

蒼い白い光が降魔を斬り裂く。

「ガアアアア!!!!」

そして、降魔は光となって消えた。

それを確認し、壱は刀をおさめた。

「ふう」

『お疲れと言っただけ苦戦はしておらんかったな』

そこに、アルが飛んできた。

「まあな」

『しかし、最近出現率が上がったようだ』

「ああ。例年なら月に一回あるかないか。数も一体程度。しかも、降魔もかつてのものとは違っているようだ」

蛮は近くのベンチに座り語りかける。

『といつとっ』

「爺さんたちの頃は、そうだな。ゲームでいうノーマル体と言ったところだ。特徴という特徴がない。だが、爺さんが言うには降魔を従えさらに機械に押し込んだという話も聞いた」

確かヤフキエル

『では、先日のアレは？』

「言つなれば、寄生体。しかも、実体と種の二つ」

『実体はわかるが種とはなんだ？』

「ラウラのことは覚えているだろう？あれは、人の心にある闇を糧に成長する。まあ、ラウラの場合は少し特殊な感じになったが」

ちなみに実体は機械と同化。

『特殊？本来はどういう現象なんだ？』

「そうだな。性格が変わるとかか？つまり、いつもと様子が違うってことだな。で、最終的には人型降魔のできあがりだ」

『人型降魔？そうなった場合、救出は？』

「完全に肉体までもが喰われていたら無理だ」

心までならまだ霊力をぶつけることで浄化可能だ。しかし、肉体まで喰われたら救うことはできない。

『そして、降魔を倒すことができるのは霊力を持つものだけ。か』

「まあ、日本には俺以外の霊力持ちはいる」

それを聞くと、アルは意外にも驚いた顔をした。

『ほお、てつきりお前だけかと』

「意外にもいるぞ。実力は確かでこわい巫女さん」

あいつ、性格がな……。

『知り合いなのか？』

「まあ、面識はある」

『うにゅ。ところで、お前どうしてそこまで詳しいのだ？今までは月に一回ぐらいだったのに情報が少ないはずだろう？』

「寄生型には一度遭遇したことあるからな」

『吾と会う前か？』

「……ああ」

『？』

その時の蛭はとても暗い表情をしていたのをアルは見逃さなかった。だが、深く聞くことはなかった。

『話は戻るが、霊力を持つ人間でないと降魔は倒せないのか？昔と違って今の技術は進んでいる』

「倒せなくはない。だが、完全に消滅することはできない。後にわかったことだが、霊力を用いない戦い、つまり現代兵器での戦闘では後に降魔は復活する。だから、完全に消滅させるには霊力持ちの人間でしか倒せない」

『だから、未だに降魔が存在するのか』

「それもある。だが、一番の原因はそれを生み出す人間だ。爺さんたちの時代も、結局は人間が起こした」

『前にもお主はそう言っておったな。しかし、そこまで一概に人間の所為だと決めつけるのは』

「すべてがそうだとは限らない。それでも、人間も発端の一つなのは変わりな……！」

蛮は突然、立ち上がった。

『どうした？』

「降魔だ」

『しかし、吾の降魔リーダーには反応が』

アルにはなんと、降魔を発見するリーダー（ウェスト製）が装備されているのだ！

「いくぞ！」

『うぬ』

今日も残業。

寝不足の日々が続くのであった。

第十八話 夜のお仕事 寝不足はお肌の大敵（後書き）

今回はこの物語での降魔の説明 + 蛮の生身での戦闘能力の紹介みたいな感じです。

ただの降魔では物足りなかったの。

実態と種と表記しましたが、実体の方は牙狼出てくるホラーの優しいバージョンを想定してくれればいいと思います。つまり、早くみつけることができれば寄生者を救えます。

種に関しては誰かが植え付けるパターンなのであまり出ないと思います。

で、蛮の戦闘能力はこんぐらいでしょ？みたいな。

降魔の大きさはそれほど大きくない設定にしています。なんて、優しいんだ……。

活動写真をみると光武と同等ぐらいだと思ったので。

だんだん、ISの成分が薄くなってるけどいいよね？

あと、今年最後ということでもう一話投稿しますので。

それでは感想待っております

第十九話 ハワイってみたいなbY作者(前書き)

これで今年最後の更新です！

第十九話 ハワイいつてみたいなb y作者

話は飛んで、気付けば臨海学校。

ただの臨界学校でなく、ISに関することも行うのだ。だが、それでも臨界学校なので自由時間というのはあるものである。

「というわけで、海ですー」

ファサリナ降臨。

その露出度から痴女と言われてもおかしくないハイレグの水着を纏っている彼女。しかし、これでも彼女はアレなのだ！

「うわー、ファサリナ先生凄い・・・」

「どうやったたらそうなるのよ・・・」

周りの生徒もそれに憧れと嫉妬の眼差しを送っている。

「そうですねえ・・・まあ、育つ人は育つ。育たない人は育たない
ですかねえ」

直球だった。

「やっぱりそうよね……」

「牛乳なんて都市伝説なのよ……」

「貧乳はステータス……。所詮、ステータスなのよ……」

膝をつく彼女達。そんな中、特にちっちゃい部類に入る眼帯の口リ
ラウラ。

彼女は、まるで誰かを探しているようだった。

「おかしい。壘殿がどこにも見当たらない」

そう言えば、バスにもいなかった。
となると、別の移動手段で？

「そうよね、折角勝負水着できたのに」

「うー！ふあ、ファサリナ……先生」

流石に先生であり、年上なのでため口は聞けないラウラであった。

「先生なのに知らないのですか？」

「だって、担任じゃないんですもの・・・あ、織斑先生」

丁度いい所に水着に着替えてきた千冬が居たのでファサリナは尋ねた。

「大神殿は、臨海学校に来ていない」

「あら、どうしてですか？」

「しらん」

「使えませんね、担任の癖に」

「ッ。だったら、お前があいつの担任をやったらどうだ？」

「ええ、喜んで」

「・・・」

返したつもりが逆に返せなくなってしまったのであった。

で、その問題の童貞くんはとらじんと・・・

「海だ！水着だ！inハワイ！！」

ビーチで思いっきり叫ぶ男。

諸君らは覚えているだろうか？いつか、瑠璃にハワイにいきますよと言われた時のことを。

「というわけで、やってきたハワイ」

まあ、臨海学校いくならハワイでしょ？

「さて、どこに美しいレディは・・・むむむー」

目に写ったのはパラソルの下で仰向けになっているなんとも多岐い双丘をお持ちのレディだった。

「じほん。その、レディ。私と一緒にランチでも（キラーン）」
決まった！

「それは、嬉しいお誘いだ。こんな僕でもいいのかな、君は？」

「へ？」

外人で僕っ子だと？！

すると目の前の彼女はサングラスを外した。だが、彼女は蛮が想像していない驚きの人物だった。

「・・・・・・・・」

「おや、どうしたんだい？・・・ん、どうやら僕はお呼びじゃないみたいだね。それじゃあ、またどこかで」

そう言って彼女は去っていた。
だが、去ったあとでも彼は放心していた。
何故か。

それは・・・

「なんで、いるんだ」

彼は出る筈のない名前を言った。

「ナイアルラトホテップ……」

デモンベインでは謎の本屋の店主として、九郎にちよつとした助言などを与えた人物。あとは、おっぱいが大きい。とにかく大きい。大事な（ry

だが、その実態はクトウルフ神話に登場する架空の神性。旧支配者でもあり、まとめると無貌の神・這い寄る混沌でありゲームの中では黒幕の立場である。

だが、問題なのはそこではない。

なぜ、「この世界にいる」かだ。この世界は言うなれば、あの神が生み出した世界もしくはifの世界だ。その世界に霸道財閥という（もともとウエストだけが）ファクターが組み込まれた。さらに、おまけでアルやデモンベインまで。本来、来るはずのないものまで来てしまったのが原因なのか？

デモンベインのキャラクター達が介入したことにより、彼女もまた存在した……？

なら、彼女だけではなく他の……ヤバイ。

邪神とか俺かてねーよ。俺、九郎ちゃんじゃないもん。魔力ないし、霊力あるけど。

「なにをやってるか、このうつけめ!」

「ぐほお!」

突然、壘の背中にドロップキックがさく裂した。声からして、あいつなのはわかっていた。

「テメエ、アル!なにしやが……る」

「おうおう、どうした? 鳩が豆鉄砲をくらったような顔をして(2828)」

そこにはアルがいた。確かにアルがいた。だが……。

「なんで、お前人型になってんだよ」

「どうだ、凄いだろ(ドヤッ)」

なんと、ちびアルはアル・アジフに進化した!

「なに、前々からウエストに頼んでおいたのだ」

「で、素体は？」

「どこの錬金術師の本を読んで造ったらしいぞ？」

「等価交換は？」

まあ、命じゃないから素体だけならあそこいかないか……。

「知らん」

「あつそ」

「それに、今までのを含めて三形態に自由自在なのだ！」

「すごいね〜」

本当、あいつは言ったらなんでも造ってくれるよな。この間なんてどこでもドアを造ってもらったぜ。

「まったく、戸籍を作るこちらのみにもなってもらいたいものですわ」

そう言って現れたのは瑠璃だった。

「なんだ、瑠璃。アルの戸籍も作ったのか」

「ええ。必要でしょうから」

「うむ、感謝する」

「ところで、瑠璃。なんで、ハワイに？ただ、遊びに来ただけじゃないんだろっ？」

だって、瑠璃忙しいしな。

「最初は、本当に遊びに来る予定でしたわ」

「（マジかよ・・・）」

「けど、この間の件。覚えてます？」

「ああ、少佐のね」

この間のドッグファイトのことか。

「それで、何故かは知りませんが先日のお礼とかでISの新型起動実験にご招待だそうです」

礼つて……。やっぱり、空軍？

「いいのか？軍事機密みせて」

「まあ、霸道ですし」

可能性としてはお披露目として好評化を得たいがため。それによつて資金提供をもらうとか・・・が可能性としては高いか？

「世界の霸道だもんな……。そういえば、霸道つてIS関係で何か関わつてたっけ？」

「まあ、一割？」

「精確には一割も満たしておりません、お嬢様」

ウィンフィールドが補足してくれた。

やっぱり、執事服だった。

「なんで？」

「だって、ISなんてあのキガイに造らせればいつでもできますもの。それより、経済、政治、工業、農業その他etcに力を注いだ方がもう・・・効率がいいですし」

「（今絶対儲けになるって言おうとしたよ・・・）それより、キチガなんて言うな。下品だぞ」

「それはすみません。でも考えてみなさい、鸾。ISよりいいものなんて彼に造らせればいいじゃありませんか」

「まあな。やっぱさ、ドラ もん作るうぜ。一家に一台。ぜってー売れるって」

「大御所が黙っていませんわ」

「買い取れよ」

「それに、私ドラ・ザ・キッド派ですわ」

話そらしやがった！

「ドラえもんズだったらドラニコフが俺は好きだけど」

今の子供はドラえもんズなんて知らないだろうな・・・。今の方は存在しないし。

「とにかく！明日、試験が行われる基地に向かいますので今日は思う存分遊んでおきなさい」

「おおー！ー」

アルはなぜかメツチャテンション高い。

「あれ、そういえばウエストとエルザは？」

てっきり、あの二人も来てると思ったんだが。

「ああ、あの二人は・・・まあ明日会えますわ」

「？」

「それより、蛮」

「なんだ、瑠璃」

改まってとても真剣な眼差しを向けられた。

「なんで、タキシードなんですか？」

「私服だぞ、これ」

「水着は?!」

「水陸両用!!」

「意味が違います!」

その後、一時間ミツチリ説教を受けた蛮であった。

翌日

というわけで、やってきました。ただいま、海の上でございませう。なんでも、ハワイ沖で試験するということでわざわざ空母までひっぱって来たらしい。

で、来たら来たらで兵士の皆さんには大変お褒めの言葉をいただきました。空軍だけかと思ったら海軍の方まで俺の噂があったらしいです。

さて、本題のISの起動実験なのですが……。

「機体に異常発生!」

どうやら、実験は失敗し事件が起きました……。

第十九話 ハワイ行ってみたいなbY作者（後書き）

今年最後なのにこんな終わり方・・・

ま、いつか。

第二十話 飛べないなんて美しくないわ(前書き)

あけましておめでとう………14日経ってるけどな！

第二十話 飛べないなんて美しくないわ

*** 旅館 臨時作戦司令室 ***

銀の福音が暴走したことは臨海学校を行っていたIS学園一向にも伝わっていた。

そして、急遽専用機持ちを集め作戦会議を行っていた。だが、そこにISの生みの親であり、残念な天才こと篠ノ之束が現れ、自分が制作したISを薦め結果。一撃必殺を持つ、白式の零落白夜を持つ織斑一夏とその束製紅椿を用いての作戦が決行されているのだが・・。

「この作戦の成功率は限りなく低いと私は思います」

間に口を刺したのはファサリナさんだった。

「ファサリナ先生、理由を述べてもらおう」

「作戦自体が悪いとは言いませんが、不安要素が多すぎます」

「そのためのこの人選であり作戦内容だ」

「ですから、せめて作戦失敗を考慮し。残りの専用機持ち達を予想地点に配置し、作戦実行者である二人の撤退戦を援護し・・・」

「私が失敗などありえません」

自信満々に発言したのはその当事者になる篠ノ之箒であった。

「篠ノ之さん、私は可能性の話をしているんです。貴方たちは生徒です。私達は教師としてあなた達の安全を守らなければいけない義務があります」

「では、私と一夏が失敗しなければいい話です」

「おい、箒・・・。先生だって俺達のことを思っているんだぞ？」

「なら、お前は私たちが失敗すると思っっているのか？」

「はぁ・・・。。もういいです。最終的に決定するのは、織斑先生。あなたなのですから」

「・・・・・・・・・・」

「はあ」

二度目の溜息をファサリナは旅館の廊下でついた。結果から言えば、私の提案は受け入れられた。

「しかし、あの女（人）は・・・」

あのと、また篠ノ之博士が横やりを入れられた。まったく、どうしてあんな子供なのでしょうか・・・。
まあ、どうみても裏があるのは間違いないようですが・・・。

「ファサリナ先生」

「あら、ラウラさん」

「今回ばかりはあなたの意見に賛成です」

「ばかりって、今回だけじゃないですか」

まあ、とにかく。

「人のことを言えた義理ではないが、二人ともISの操縦訓練を受けてまだ約三か月。内一人は新しい機体を受け取ったばかり。だか

ら、あなたの意見は間違っていないです」

「それはどうも御親切に。けど、その通りなんですよね。不安は」

「ええ。まあ、やるからには全力でやりますが」

「でも、あの人がいれば・・・」

「そうですね・・・」

二人は遠い目で空を見上げた。

ああ、あの人がいればこんなにも苦勞することはないんだろうな・・・別の意味でと。

そして、そのあの人と言えば・・・

アメリカ海軍 某空母

銀の福音の暴走から数時間後。

政府は対応の末、“偶然”にも福音の進路上にIS学園が滞在していることを知り対処を学園に委ねた。

だが、さすがに軍としても。いや、政府としてはこの失態をIS学園に任せるのは本意であり。本音を言えば、借りを作りたくない

のが本音である。

できることならば、自分の尻拭いは自分で拭きたいと言ったところ。

「で、俺にその尻拭いをしろと」

空母のとある一室で俺は瑠璃に軍からの要請の話を聞かされていた。

「だ、そうですね」

「一応俺、IS学園の生徒だぜ？」

「個人の依頼なので、学園に借りをつくるといふことにはならない
と知っているんでしょうが」

「別にアメリカに貸をつくるのはいいが、デモンベインは飛べない
ぞ？」

そう、飛べない。デモンベインは飛べないのだ。正確にはまだ、飛
べない。

「となるとヘリで現地に輸送か？」

「ああ、そのことなら。ウインフィールド」

「そうですね。そろそろかと」

「?何の話を『ぬっはっははははは!』このいかにもタイミングを狙っていた声は・・・」

空母内にまで響くこの声の主は一人しかいない。そう思つて甲板に出てみると。

「こんなこともあろうかと!」

霸道印の輸送ヘリのハッチからギターを弾いて現れたのはやっぱりあいつだった。

「ウエスト!」

「どうだ、蛮!お前のためにスペシャルなアイテムを持ってきてやったのであゝゝる!」

「エルザもいるロボよ!」

「とっ!」

そして、ヘリから飛び降りるウエスト。ちなみに高さはまだ数メートルはあるのだが。

「（キリッ！ドヤッ！）」

着地してそんな顔をすんな・・・。

「で、何を持ってきたんだ？」

「聞いて驚け、見て驚くな！」

「どっちだよ」

「これがデモンベインサポートメカ　　！！」

へりの中にあるなにやら機械なものにシートがかけられていた。
そして、ウエストはそれをカッコよく剥いだ。

「ガルスである！！！！」

そこにはメツチャカッコイイバイクがあった。
形的にはスポーツバイクのようだが・・・。

モデルはブラスレイターのガルス（改の状態です）

「しかし、これじゃあ・・・」

「ふっふふ。吾輩がただのバイクを作ると思ったら大間違いなので

ある！エルザ！」

「ラジャー！高機動モードONロボ！」

するとどうだろうか。車体のあちこちが変形を遂げ、巨大なバイクへと変化したのである！

原作より多少車体が大きいです。

「す、すっげー！！（キラキラ）」

「陸地でも最高速度は300？はなんのその！そして、飛行モードを備えたすぐれもの！さらに、なんかISの拡張領域をパクって武装も装備可能！」

「な、なんだってー！！！」

「そして、さらにこのガルムにはもう二つの機能があるロボ！」

「ああ！吾輩が一番言ったかった台詞を！」

「やべえ、バイクにこれだけの浪漫を・・・！！！」

「ガルムの動力は最新のエンジン（HOD提供）と、あとはお前の霊力で稼働が可能だぞ」

「成程。まさに、俺専用の機体というわけか」

「うむ。ああ、それと。もう一つおまけだ。お前にプレゼントだ」

「プレゼント？」

するとシートの前。タンクの部分にパネルがあり、そこから小さな少女？ゴスロリ妖精が現れた。

「つい先日ぶり、かしら壺？」

「先日ぶり・・・？」

先日ぶりってことは・・・雪風・・・雪風？！

「お前、雪風なのか？！」

「ええ」

「でも、お前は・・・あなんていうのかな・・・」

「それについては私が説明しますわ」

「瑠璃？」

瑠璃まで現れて話がややこしくなった。

「実はあのあと、雪風。まあ、あの機体は……ごによごによ」

背伸びして俺の耳に密かに伝えてきた。

「おいおい……いいのかそれ？」

「いいんですわよ。態々こんだけ金をくれてやったんですから」

指でその額を示してきた。額は流石に言えないのでご想像にお任せする。

ていうか、性能欲しさに買収とか。容赦ねえなおい。

「くれてやったって、お前な……」

「まあ、そのあとは吾輩が予てから創案していたデモンベインのサポートメカに雪風、彼女を搭載したというわけだ」

「ちなみに、今は雪風ではなくエレアを名乗っているわ」

なぜだろう。違和感がまったくない。

「まあ、またお前と一緒に戦えるのは嬉しいよ」

「ふふ、当たり前でしょ」

「うにゅ、吾の足を引っ張るでないぞ」

横からない胸でエツヘンとしたアルが横やりを入れた。

「飛べないあなたよりは役に立つと思うけど？」

「なんだと！吾だって、飛べるようになればお主などいらんのだ！」

「そうやってすぐ怒るなんて、美しくないわ」

「むきー！！」

そんな二人？を無視して壘は状況の確認を行っていた。

「で、今向こうの状況は？」

「衛星からの映像では、すでに戦闘に入っているようであるが・・・」

お

「どうした？」

ウエストの端末に流れている映像には何か落ちてゆく映像が流れた。

「どつやら終わったようであるな」

「失敗か。じゃあ、今の内に向かうか」

「お主、バイクの癖に生意気なのだ！」

「美しくないあなたに言われたくないわ！」

そんな中で未だに空気を読めない二人。

「はあ。アル、エレナ行くぞ」

「うぬ（ええ）」

「（切替早）」

なんだかんだで仲がいいと思いながら二人と一台は輸送へリに入り、ハッチが閉まる。

「頑張つてこい~~~~である!!」

「ダーリン、待ってるロボ~~~~!!」

「早く帰ってくるのですよー」

「お気をつけて」

各々から送る言葉をかけられて戦地に向かう蛮一向。

「さて、フラグを阻止するためいざ往かん！」

「なぜなのだ？」

「だって、どうせあのイケメンがフラグ立てるに決まってんじゃない」

「……………」

緊張感もない発言だなと二人は思った。

「本当、美しくないわ」

しかし、彼らは知らない。

今回とんでもないフラグが（作者によって）起こることを……………。

第二十話 飛べないなんて美しくないわ（後書き）

ふふ、どうだ。雪風をエレアに仕立てるこの荒技……

しかも、バイク、バイクだZE！！

知っている人は知っているブラスレイター、本当バイクがカッコイイですよ。

さらに、デモンベインがバイクに乗るなんて。夢のようだ……。

例えるとデカレンジャーロボ⇨デカライディングロボ？だけ。アレもカッコイイよね。ロボにバイクとか。

今回を機にできるだけニトロキャラを出そうかなと思っています。

まあ、やったことがある作品はすくないけど。

次回はいつになるのかはわからないけど……ゆっくり待っててね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3816x/>

おっさんが逝くIS物語

2012年1月14日10時25分発行